

鹿児島県総合教育センター

令和3年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」  
と学び続ける児童の育成を目指して  
—内発的動機を高める学習方法の工夫と  
児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業を通して—



「CLIL」の授業の様子

鹿児島市立広木小学校

教 諭 横手 優子



## 目 次

|     |                                       |    |
|-----|---------------------------------------|----|
| I   | 研究主題設定の理由                             | 1  |
| II  | 研究の構想                                 |    |
| 1   | 研究のねらい                                | 1  |
| 2   | 研究の仮説                                 | 2  |
| 3   | 研究の計画                                 | 2  |
| III | 研究の実際                                 |    |
| 1   | 児童の実態                                 |    |
| (1) | 実態調査の概要                               | 2  |
| (2) | 結果と考察                                 | 2  |
| 2   | 研究主題に関する基本的な考え方                       |    |
| (1) | 「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の姿について | 3  |
| (2) | 研究の視点                                 | 3  |
| (3) | 【視点1】における具体的な工夫                       | 5  |
| (4) | 【視点2】における具体的な工夫                       | 6  |
| IV  | 検証授業Ⅰの実際と考察                           |    |
| 1   | 検証授業Ⅰの概要                              | 7  |
| 2   | 検証授業Ⅰにおける視点と具体的な手立て                   |    |
| (1) | 検証授業Ⅰの視点における手立て                       | 8  |
| (2) | 検証授業Ⅰの指導計画と具体的な手立て                    | 9  |
| (3) | 検証授業Ⅰ（外国語科の授業）の実際                     | 10 |
| (4) | 検証授業Ⅰ（「CLIL」の授業）の実際                   | 11 |
| (5) | 検証授業Ⅰ後の考察                             | 13 |
| V   | 検証授業Ⅱの実際と考察                           |    |
| 1   | 検証授業Ⅱの概要                              | 15 |
| 2   | 検証授業Ⅱにおける視点と具体的な手立て                   |    |
| (1) | 検証授業Ⅱの視点における手立て                       | 15 |
| (2) | 検証授業Ⅱの指導計画                            | 16 |
| (3) | 検証授業Ⅱにおける【視点1】の工夫の実際                  | 18 |
| (4) | 検証授業Ⅱにおける【視点2】の工夫の実際                  | 24 |
| (5) | 検証授業Ⅱの考察                              | 26 |
| VI  | 研究のまとめ                                | 27 |
| 1   | 研究の成果                                 | 28 |
| 2   | 研究の課題                                 | 28 |

※ 引用文献，参考文献・URL



## I 研究主題設定の理由

急速なグローバル化の進展やインターネットの普及により、将来を予測することが困難な時代となっている。このような時代にあって、文部科学省<sup>1)</sup> (2017) は、中学年の外国語活動の導入の趣旨の中で、「外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と示した。

また、文部科学省<sup>1)</sup> (2017) は、外国語の目標として、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力として、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の三点を示している。

さらに、本校の学校教育目標では、「自ら進んで学び、共に高め合う、心豊かなたくましい広木の子-大きな夢をもつ広木の子-」と掲げており、児童自ら学び合い高め合う姿を理想と定めている(資料1)。このような理想を掲げる本校の外国語科の授業において、児童は AEA (英会話活動協力員) や担任の指導の工夫によりゲームや歌等を通して楽しく活動している。しかし、事前に行った実態調査結果では、自分の考えや気持ちを伝え合うことに自信がない児童が68%いることが分かり、外国語を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な資質・能力が児童に育っていないという課題が見えてきた。

その要因として、多くの児童が授業において学習内容をよく理解していないために学習の定着が図れていないことと、外国語を活用する機会が不十分であることがその一因として考えられる。その結果、自分の考えや気持ちを伝え合うことに自信がなかったり、外国語を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な資質・能力が育っていなかったりする児童の姿につながっている可能性がある。

そこで、これらの解決を図るために、本研究では内発的動機づけの先行研究を基に、児童が外国語を学習する中で外国語によるコミュニケーションの面白さや楽しさを感じ、主体的に外国語を学習するようになるために学習方法をどのように工夫できるかを研究していく。加えて、外国語で行われる学習の内容理解に重点をおきながら、児童と教師が共に外国語を活用できる場面設定を多くするために、「CLIL (Content and Language Integrated Learning)」に基づく授業を展開し、研究主題にある児童像に迫ることができるかを追究する。「CLIL」は「内容言語統合型学習」を意味し、他教科等の内容や話題と同時に外国語を学習する方法である。(本稿 p. 4 のイ参照)。外国語を活用する力や興味・関心、既習内容を児童の実態に合わせて「CLIL」に基づく授業を行えば、児童は学習内容や学習テーマにある課題解決のために自分の気持ちや考えを互いに伝え合いながら考えを深め、実際のコミュニケーションの中で外国語を活用する力を身に付けることができるのではないかと考える。

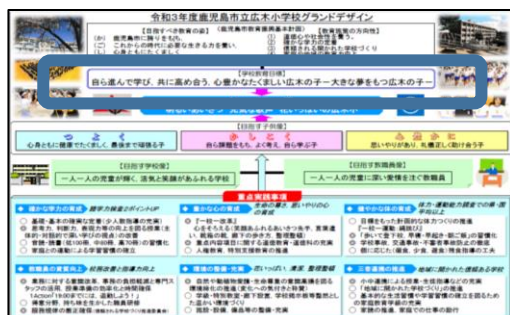
これらの研究を通して、先行研究を基に外国語によるコミュニケーションへの内発的動機を高める工夫と児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業の在り方の開発を図り、「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の育成を目指す。

## II 研究の構想

### 1 研究のねらい

- (1) 児童の実態調査を分析し、実態を把握するとともに、指導上の課題を明らかにする。
- (2) 内発的動機を高める学習方法の工夫や「CLIL」の基礎・基本、児童の実態に合った「CLIL」の授業の在り方をまとめ、効果的な学習指導方法を探る。
- (3) 検証授業を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

資料1 本校グランドデザイン

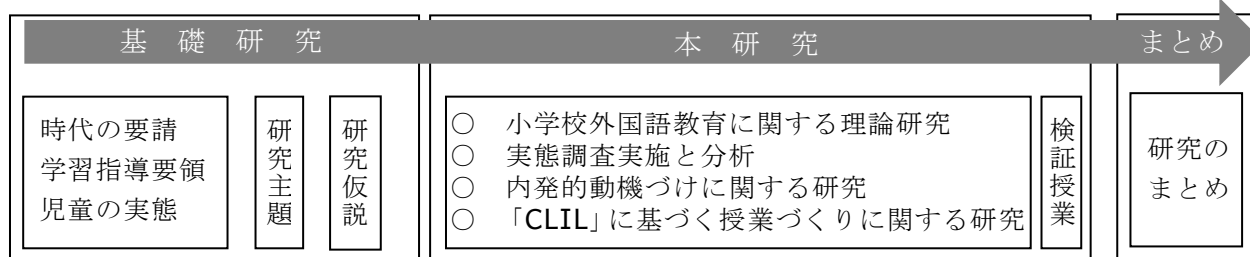


1) 文部科学省 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』 2017 年 開隆堂

## 2 研究の仮説

外国語科の授業において、内発的動機を高める学習方法の工夫と児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業をすることで、「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の育成を図れるのではないかと。

## 3 研究の計画



## Ⅲ 研究の実際

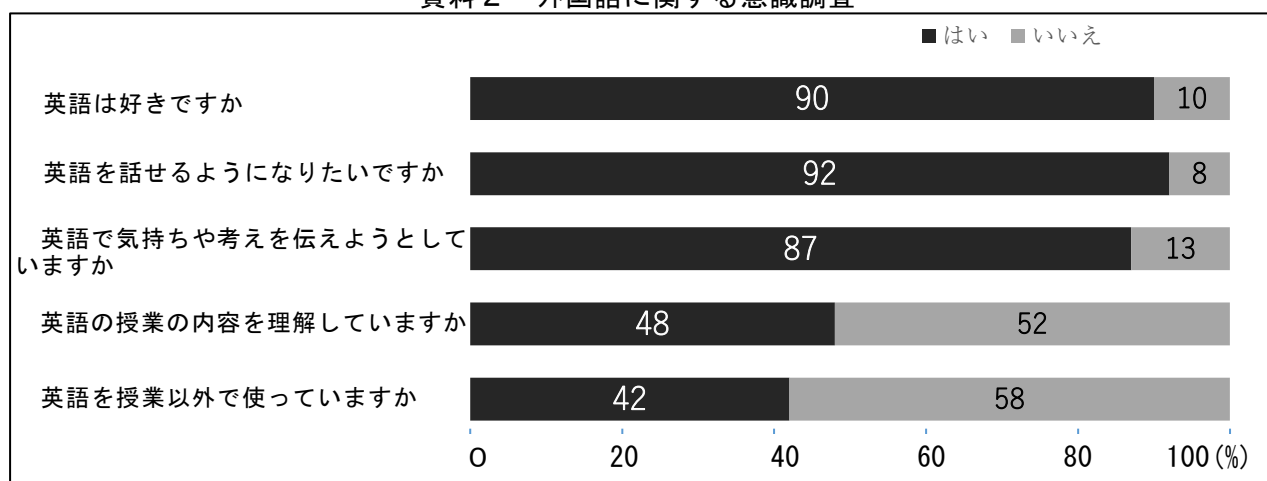
### 1 児童の実態

#### (1) 実態調査の概要

- ア 対 象 鹿児島市立広木小学校第6学年1組38人  
 イ 実施日 令和3年5月28日（金）  
 ウ 方 法 質問紙法  
 エ 内 容 外国語と外国語科の授業に対する意識

#### (2) 結果と考察

資料2 外国語に関する意識調査



調査結果（資料2）によると90%の児童が「英語は好き。」と回答しており、92%の児童が「英語を話せるようになりたい。」と思っていることが分かる。一方で、「外国語科の授業の内容を理解していますか。」の質問に対して「はい」と回答した児童は半数を下回り、48%という結果であった。また、授業以外で英語を使っている児童も半数を下回り42%であった。

この結果から、多くの児童が「外国語を話せるようになりたい。」という意欲をもっているが、授業で自信が付くほど英語の知識や言語を活用する力を十分に身に付けられていない現状があることが分かる。また、87%の児童が授業内では自分の気持ちや考えを伝えようとするが、授業で学んだ英語を授業以外の場で積極的に生かす機会が少ないことが分かる。

そこで、児童が「もっと英語でコミュニケーションを取りたい。」と思うように内発的動機を高める必要がある。これまでの数々の先行研究により、内発的動機が高まった児童は、主体的に学んでいくことが明らかにされている。「もっと英語でコミュニケーションしたい。」と思う児童は、実際に英語を活用する中で、英語でのコミュニケーションを図れた経験を積み、徐々に英語への自信を高めることができると期待される。

## 2 研究主題に関する基本的な考え方

### (1) 「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の姿について

直山<sup>2)</sup> (2021) は「外国語を学習する意義」を「子供たちの『世界』を広げること」と示している。ICT技術の発展に伴い、誰もが容易に世界中の人々とコミュニケーションを図ることができるようになった社会では、言葉によるコミュニケーションや自分と異なる背景や価値観をもつ人と伝え合おう、理解し合おうとする態度はますます重要になってくると考える。外国語を学習することはただ言葉やその使い方だけを学習するのではなく、自分たちのルールや考え方が通用しない世界、自分や自分の周囲とは異なる文化や価値観があることを知ることでもある。つまり、英語を学ぶことは新しい世界への窓口を広げることにつながり、地球市民意識をもたせることができるのではないかと考える。直山は外国語教育の目指すところは「自分の伝えたいことを外国語で伝えられることにある」とも示す。児童は自分の得意なことや好きなことなどを相手に知ってもらえると嬉しくなり、相手の知らない面を知ると、コミュニケーションの楽しさを感じるのではないかと考える。これらの経験は児童の「もっと伝えたい」という思いにつながる。自分の伝えたいことはその目的、場面、状況によって変わる。その場に合った適切な外国語の表現を習得し、活用する力が求められるため、授業内外を通して学び続ける必要がある。自分の考えや気持ちを伝えられた経験ををした児童は「もっと伝えたい」と思い、授業以外でも自ら外国語を学ぶようになると思う。

そこで、本研究主題で示す具体的な児童の姿を「英語でのコミュニケーションを面白く楽しいと感じながら、既習表現を使おうとしたり、自分からALTに話し掛けたりする児童」とした。さらに、「英語での表現方法が分からない際、自分のもっている知識を活用し外国語の見方・考え方を働かせて自分の気持ちや考えを伝えようとし、友達や教師に尋ねたり教科書等で調べたりと適切な学習方法を選んで自ら学ぼうとする児童」とした。このような態度を身に付けた児童は外国語学習に対する意欲を抱き続け、自らの生活において主体的に学び続けると考えた。

### (2) 研究の視点

課題として英語の知識・技能を身に付けられていない現状や学んだ英語を生かす機会が少ないことを挙げたが、それらを解決するために、内発的動機を高める工夫と英語を活用する機会を設定することを実践・研究に取り入れる。

#### ア 内発的動機を高める学習方法の工夫について【視点1】

内発的動機を高める学習方法の工夫とは、児童が英語を自ら使いたくなるように授業において単元目標の工夫をしたり、言語活動の工夫をしたりすることである。

デシ&フラスト<sup>3)</sup> (1999) は「内発的動機づけ」を「有能さと自己決定への欲求に基づく動機づけ」と定義し、内発的動機づけを自律性、関係性、有能感の三要素に分けた(資料3)。これら三要素で示された欲求を外国語科の授業の中で満たすことができれば、児童は外国語学習に対して内発的動機を高めることができると考える。

そこで、本研究では児童が学習活動の中で表現する内容や表現方法を自己決定できるようにし、自分自身で行動を選び決めたいという児童の欲求を満たすことで自律性を高める。そして、グループ活動やペア活動の中で児童が協働のよさを感じられるような工夫を図ることで、友達と助け合いたいという児童の心理的欲求を満たし、関係性を高める。また、児童が自分の考えや気持ちを深めて、考えや気持ちを誰かに伝えられるように言語活動の工夫を図ることで「外国語でコミュニケーションすることができた。」「自分の伝えたいことが伝えられた。」と心理的欲求を満たし、有能感を高める。これらの工夫を行うことで主題に迫る児童の育成を図ることができると考える。

資料3 内発的動機づけの三要素  
(デシ&フラスト(1999)を基に作成)

|                                          |
|------------------------------------------|
| ①自律性：自己に裏付けされた行動をしたいという欲求                |
| ②関係性：他者や集団との緊密な関係を確立したいという心理的欲求          |
| ③有能感：自身の力によって内的・外的環境と効果的にやりとりをしたという心理的欲求 |

2) 直山木綿子 『小学校外国語教育の指導と評価』 2021年 ぶんけい

3) エドワード・L・デシ & リチャード・フラスト 『人を伸ばす力』 (桜井茂男監訳) 1999年 新曜社

## イ 児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりについて【視点2】

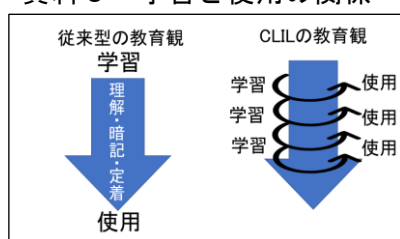
本研究では、和泉<sup>4)</sup> (2016) の言う「CLIL」のよさが現在の課題に合っているのを、導入を図ることにした。「CLIL」のよさとは、次の三点であると言える（資料4）。

資料4 「CLIL」のよさ

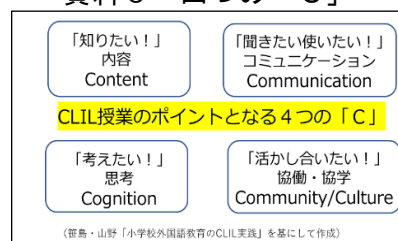
|     |                                                      |
|-----|------------------------------------------------------|
| よさ① | 外国語を体験的に学び、知識や技能を身に付けることにより、学習者は外国語を活用する力を身に付けやすくなる。 |
| よさ② | 外国語使用の「正確さ」よりも「伝わっている」ことが重要視されるため、外国語使用の不安軽減ができる。    |
| よさ③ | 互いに考えを伝え合う中で、外国語に対して自信も高められる。                        |

次に「CLIL」について説明する。「CLIL」は外国語の語彙や文法等を学習してから活用していく従来の形式重視の外国語学習とは異なり、体験的に外国語の学習と活用を繰り返しながら体験的に言語を学ぶヨーロッパ発祥の外国語の学習方法である（資料5）。

資料5 学習と使用の関係

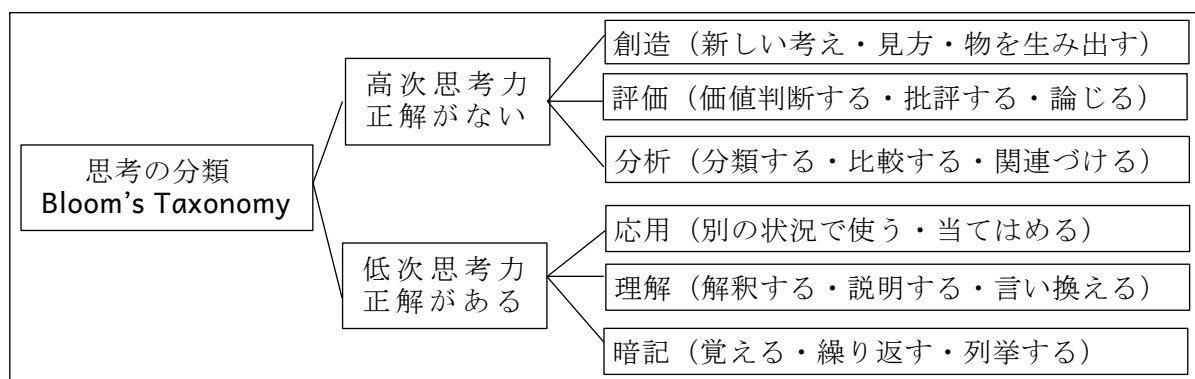


資料6 四つの「C」



「CLIL」の授業は、「CLIL」の指針となる四つの「C」で構成される（資料6）。Contentは学習する内容つまり科目やトピックである。児童の発達段階に応じた既習事項を学習内容することで、児童の知的好奇心を刺激すると思われる。Communicationは対話や言語使用および言語を学ぶことを指す。しかし、「CLIL」では言語知識（語彙、文法、発音等）の獲得や4技能（聞く、話す、読む、書く）の訓練といった言語学習よりも、対人コミュニケーションと学習ツールとしての言語使用に比重が置かれる。Cognitionは様々なレベルの思考力を指す。低次思考力（理解や暗記等）に頼るだけの学習ではなく、正解のない課題や活動に向けて高次思考力（応用、分析、評価、創造）を働かせながら学習する（資料7）。またCommunity/Cultureとは異文化理解もっと広く捉えて地球市民意識を指し、資料8にあるように教室から学校へと各層において互いに助け合い学ぶ協学や協働も意味する。つまり語るべき内容（Content）があるからこそ、他者に伝える手段として言語（Communication）が必要になる。また、考えるべき内容があるからこそ、思考（Cognition）が刺激されていく。さらに加えて、他者との交わり（Community）があるからこそコミュニケーションが重要になるという理論である。四つの「C」はそれぞれ密接に関わって存在することになる。

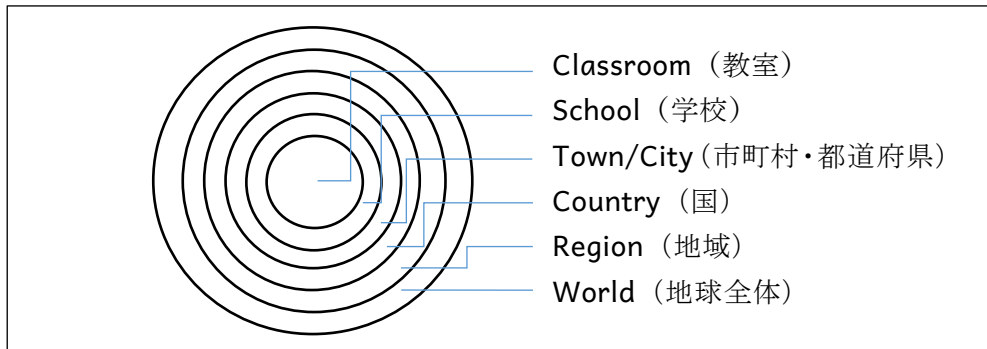
資料7 Bloomの教育目標分類（改訂版）（池田<sup>5)</sup> 2016p.13より取得：Anderson et al., 2001:31を改変）



4) 和泉伸一 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』 2016 年 株式会社アルク

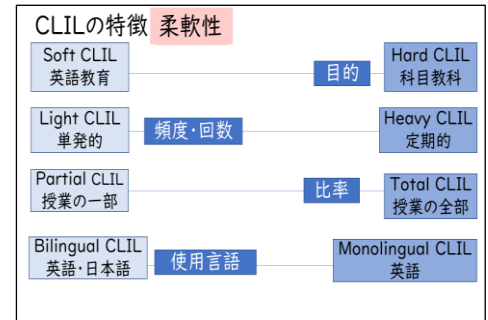
5) 池田真 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦』 2016 年 上智大学出版

資料8 「CLIL」における Community の概念（池田<sup>5)</sup> 2016p. 9より取得）



「CLIL」の特徴は、柔軟性であると和泉<sup>4)</sup>は言う（資料9）。教師は学習者の実態に合わせて柔軟に授業づくりができる。例えば、外国語と日本語の使用率を児童に合わせることができる。授業の一部だけを、もしくは、授業の全てを「CLIL」にすることも可能である。児童が既習か未習かで授業で扱う学習内容を簡単にしたり難しくしたりできるため、小学校低学年でも十分実践できる。「CLIL」では様々な学習内容を言語学習と結び付けるため、学習内容に興味や強みがあれば言語能力が高くない児童でも活躍の場が広がり、学習の動機付けを行うことが可能になる。小学校外国語科で言えば6年生に体育の学習を英語で行うといった教科等横断的な学習にすることで、英語が苦手な児童も体育が得意であれば十分に活躍できるということである。教師が児童の実態に合った工夫を図ることで、児童の不安を軽減させながら外国語を活用する力と自信を付けられ、主題に迫る児童の育成を図ることができると思う。

資料9 「CLIL」の柔軟性



また、笹島<sup>6)</sup>（2019）は「『CLIL』では、指導者が学習者に応じて言語学習と科目内容の要素のバランスを考え、学びを支援し、自律学習を促すように工夫し、型にはまった指導法に執着することなく柔軟に展開できる。よって、児童の実態に適した『CLIL』を開発する必要がある。」と述べている。児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業の中で児童は学習内容や学習テーマに沿って深く考え、自分の気持ちや考えを互いに伝え合い、外国語を活用する力を体験的に身に付ける中で自然と自信を付けることができると考える。

(3) 【視点1】における具体的な工夫

【視点1】内発的動機を高める工夫は、自律性、関係性、有能感の三要素を基に設定する。

ア 自律性を高める工夫

児童の自律性を高める工夫として、児童が単元目標を達成するために学習方法や活用する英語の表現を選択肢の中から選んで自己決定できる場を多く設定する。例えば、「どのように取り組むか。」「どのような表現をするか。」など児童が決められるようにする（資料10）。

資料10 自己決定する場面の例

- ・ 単元最後の言語活動をどのような方法で発表するのか決められるようにする。
- ・ 何を発表するのか、どの表現を扱うかを自己決定できるようにする。
- ・ 英語の表現が分からない時、「友達や教師に尋ねるか。」「教科書や辞書を使って調べるか。」など学習方法を自己決定できるようにする。

イ 関係性を高める工夫

児童の関係性を高める工夫として、ペアやグループによる活動を通して児童が協働のよさを感じられる活動を設定する。例えば、学習目標を達成するために児童同士で英語の表現を教え合ったり、活動の中で助け合ったり、学び合う中で高め合ったりするような活動を導入する（資料11）。

6) 笹島茂・山野有紀 『学びをつなぐ小学校外国語教育のCLIL実践』 2019年 三修社

## 資料 11 協働する活動の例

- ・ 学習目標や課題を達成したり解決したりするために、児童が互いに助け合う活動
- ・ 分からない語彙や表現があった際、児童が互いに補助して教え合う活動
- ・ 児童が互いのよさを認めて高め合える活動

### ウ 有能感を高める工夫

児童の有能感を高める工夫として、児童が「できた。」「分かった。」と実感できる場や手立てを設定する(資料 12)。

## 資料 12 有能感を高める場の例

- ・ 外国語科の授業で英語を活用した児童に教師や児童、ALT がフィードバックする場を多く設定する。例えば、児童が互いに「いいな。」と思う表現や真似したい表現を伝え合ったり、教師やALT がうなずきやアイコンタクトを積極的に行ったりする。
- ・ ルーブリックを活用し、児童と教師が「何ができるようになったか。」「何が分かったか。」を把握できるようにする。

### (4) 【視点 2】における具体的な工夫

【視点 2】児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりをするために、従来の外国語科の授業づくりに五つの項目を追加して行う。従来の外国語科の授業づくりとは、文法や発音などを先に教えてから、活用させる授業を意味する。

#### ア 外国語と他教科等の関わりについて

外国語科の授業で扱う言語材料や題材、単元内容と「CLIL」で学習する他教科等の学習内容がどのように関わってくるかを整理する。既習語彙や表現がまだ少ない小学校高学年の児童が英語で学ぶことを考慮して、他教科等の学習内容は既習であるものを選んだり、児童が生活を通してよく知っている内容を扱ったりする。

#### イ 学習の目標について

「CLIL」は学習内容を学ぶことにも重点をおくため、言語学習となる外国語科の目標と他教科等や学習テーマの目標を分けて設定する。

#### ウ 教材の設計について(四つの「C」)

教材の設計では、「CLIL」において要となる四つの「C」に整理する。整理する際のポイントは、資料 13 のとおりである。

## 資料 13 四つの「C」を整理する際のポイント

- a : Content 学習内容やトピック、学習テーマは何か。
- b : Communication どのようなコミュニケーションが行われるか。
- c : Cognition 学びを深めるための思考ができるか。
- d : Community/Culture 協働・協学できる活動や場があるか。

#### エ 扱う言語材料について

「CLIL」の授業を行う際、教師は児童の語彙や表現のうち既習のものと未習のものを分類し、把握した上で授業を構成する(資料 14)。未習語彙と表現は、既習語彙や表現を基に児童が理解できるようにする。例えば、Cube(立方体)を表現する際、“A cube has Six squares.”で説明すると言ったことである。

## 資料 14 「CLIL」で扱う言語材料の分類表

- ・ 外国語科の学習で扱う基本的な表現(学びの中で想起する可能性がある表現)
- ・ これまでの外国語科の授業で扱った既習語彙と表現
- ・ 外国語科の授業では扱っていない未習語彙と表現

#### オ 評価について

検証授業Ⅱで行う「CLIL」に基づいた外国語科の授業において、評価の工夫を図る。この評価は指導に生かすための評価であり、記録に残す評価を行う担任と共有した。外国語科で設定する評価規準に加え、四つの「C」に基づいた項目を付け加える(資料 15)。四つの「C」のうち、コミュニケーション(Communication)は外国語科の評価の「思考・判断・表現」

で見取り、思考 (Cognition)、学習内容 (Content)、協働・協学／文化 (Community/Culture) の三つを付け加える。思考 (Cognition) を「思考・判断・表現」と別にしたのは、児童一人一人の思考の内容を見取るためである。

#### 資料 15 評価項目の内容

|                                                                           |                                                                                   |                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 外国語科の評価<br>・「知識・技能」<br>・「思考・判断・表現」<br>(Communication)<br>・「主体的に学習に取り組む態度」 |  | 「CLIL」の評価<br>・「 <u>学習内容</u> 」(Content)<br>・「 <u>思考</u> 」(Cognition)<br>・「 <u>協働・協学/文化</u> 」<br>(Community/Culture) |
|---------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

※下線部分が四つの「C」の項目

これから示す検証授業Ⅰ・Ⅱの指導計画の中では、これらの手立てを資料 16 のように表記する。

#### 資料 16 視点の手立ての表記について

|                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| (表記の例)                                                                                    |
| <b>【視点 1】</b> ーア (自律性)ー(ア) 言語活動の内容を自己決定できる単元目標の工夫<br>→ <b>1ーアー(ア)</b> ※検証授業Ⅰの指導計画では 1 も省略 |
| <b>【視点 2】</b> ーア (外国語科と他教科等の関わり)<br>→ <b>2ーア</b>                                          |
| <b>【視点 2】</b> ーウ (四つの「C」)ーa : Content (学習内容)<br>→ <b>2ーウーa</b> ※検証授業Ⅰの指導計画では 2 も省略        |

## Ⅳ 検証授業Ⅰの実際と考察

### 1 検証授業Ⅰの概要

検証授業Ⅰでは外国語科の授業と「CLIL」の概念を基とした他教科等の内容を主に扱う授業を行った (以下、「CLIL」の授業)。検証授業Ⅰのねらいは、3点ある。1点目は、外国語科の授業で児童の内発的動機を高める手立てが有効であるかを探るためである。2点目は当該教科の学習内容に重きを置いた「CLIL」の授業における外国語科で学習した英語の語彙や表現の活用方法を探るためであり、3点目は児童の実態に合わせるはどうすればよいかを探るためである。

#### 資料 17 検証授業Ⅰの概要

| <ul style="list-style-type: none"> <li>実施学年 鹿児島市立広木小学校第6学年1組 児童38人</li> <li>実施時期 令和3年6月14日(月)～7月2日(金)</li> <li>実施時数 外国語科7時間、「CLIL」の授業3時間(研究のため、創意の時間で実施)</li> </ul> |                                                    |                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                                                                                                                     | 外国語科の授業                                            | 「CLIL」の授業                                                                                                          |
| 学習内容                                                                                                                                                                | 単元名<br>Unit3 (New Horizon 6)<br>Let's go to Italy. | 3D Shapes (立体) <b>2-ア</b><br>1時間目 CLIL (算数)<br>2時間目 CLIL (算数, 体育とも関連)<br>3時間目 CLIL (算数, 社会とも関連)                    |
| 目標                                                                                                                                                                  | おすすめの国を紹介できるようになる。                                 | CLIL (算数): 立体の特徴を学ぶ。 <b>2-イ</b><br>CLIL (算数, 体育とも関連): 立体の特徴を捉え、身体で表現する。<br>CLIL (算数, 社会とも関連): 身近な建築物や世界遺産等から立体を探す。 |
| 言語材料                                                                                                                                                                | You can ～. Can you ～?                              | 図形: 既習語彙 (外国語活動にて) <b>2-エ</b><br>立体: 未習語彙                                                                          |

## 2 検証授業Ⅰにおける視点と具体的な手立て

検証授業Ⅰでは【視点1】を外国語科の授業で、【視点2】を「CLIL」の授業で検証した。外国語科の授業で児童の内発的動機を高めるためにどのような手立てが有効か、また「CLIL」に基づいた授業においては、言語学習より学習内容に重きを置いた「CLIL」の授業の場合、四つの「C」をどのように児童の実態に合わせていけばいいかを検証する。

### (1) 検証授業Ⅰの視点における手立て

【視点1】内発的動機を高める学習方法の工夫を三つと具体的な手立てを五つ設定する。

#### ア 自律性を高める工夫

児童が自己決定できるように以下の手立てをとる。

(ア) 児童が言語活動の内容を自己決定できる単元目標の工夫を図る。

(イ) 児童に言語活動の方法を決定させたり、見通しをもたせたりする工夫を図る。

単元1時間目に単元最後の言語活動の方法について児童と話し合っ決定しておく。

単元最後の言語活動の方法を決定しておくことで、児童が学習の見通しをもち、単元を通して粘り強く学習に取り組めるようにする。

(ウ) 児童が学習方法を選択できる工夫を図る。

分からない英語の表現等があった際は、教師が率先して教えるのではなく、児童が取り組みやすい学習方法を自ら選ぶことで、児童のペースで学ぶことができるようにする。

#### イ 関係性を高める工夫

児童が自然に関係性を高められるように以下の手立てをとる。

(ア) 児童がペア・グループ活動を通して協働のよさを感じられる工夫を図る。

児童が英語でやり取りをするペア・グループ活動の中でお互いをよく知ることができたり、分からない英語があったら教え合ったり、助け合ったりすることで協働のよさを感じるようにする。

#### ウ 有能感を高める工夫

児童が「できた。」「分かった。」と有能感を高められるように以下の手立てをとる。

(ア) 児童が「できた。」「分かった。」と感じられるフィードバックの工夫を図る。

聞き手側の反応により、児童が自分の発した英語で「伝わった。」と実感できるようにする。教師やALTが率先して「伝わった。」と分かる反応をしたり、英語の表現等のよさを互いに児童同士で伝え合ったりするフィードバックの場を設ける。

【視点2】児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりの工夫は、以下のとおりである (p. 7 資料 17 を参照)。

#### ア 外国語科と他教科等の関わりについて

教科内容である算数の学習内容 (立体 : 3D Shapes) と学習する外国語科 (Unit3) をどのように関わらせるか工夫を図る。

#### イ 学習の目標について

「CLIL」の授業に関しては、算数科の目標を設定し、体育科や社会科とも関連した授業にするため、体育科と社会科の内容も加えた。

#### ウ 教材の設計について (四つの「C」)

四つの「C」 (p. 6 資料 13 参照) を児童の実態に合わせる工夫を図る。

a : Content      b : Communication      c : Cognition      d : Community/Culture

#### エ 扱う言語材料について

児童の既習と未習の語彙や表現を把握するために、扱う言語材料を整理する工夫を図る。

- ・ 外国語科の授業で扱う基本的な表現
- ・ これまでの外国語科の授業で扱った既習語彙と表現 (図形)
- ・ 学習内容 (立体 : 3D Shapes) で新しく学ぶ未習語彙と表現

## (2) 検証授業Ⅰの指導計画と具体的な手立て

外国語科の授業と「CLIL」の授業の指導計画は次のとおりである。それぞれの視点における工夫と手立て(p. 8 参照)をまとめ、外国語科の授業で学んだ基本的な表現や既習表現が「CLIL」の授業の中でどのように関連したかを矢印で示してある(資料 18)。

資料 18 外国語科の授業と「CLIL」の授業の関わりについて  
 〈外国語科の授業の指導計画〉 〈「CLIL」の授業の指導計画〉

| 時 | 目標：おすすめの国を紹介できるようになる。                                                             | 学習活動 | 【視点 1】に関する工夫                                                                                          |
|---|-----------------------------------------------------------------------------------|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 学習のねらいをつかむ。                                                                       |      | ALTから「おすすめの国を紹介してほしい。」という依頼を受ける動画により児童に学習の必要性を感じさせ、単元最後の言語活動を児童が決定できるようにする。 <u>ア-(ア)</u> , <u>(イ)</u> |
| 2 | 紹介する国でできることを表す表現を学ぶ。<br>基本的表現<br>“ <u>You can ~.</u> ”<br>“ <u>It is ~.</u> ” の練習 |      | 児童が自分の本当の気持ちや考えを伝える英語を活用できるように、おすすめする国とその理由(世界遺産等を紹介)を選択肢の中から自己決定できるようにする。 <u>ア-(ア)</u>               |
| 3 | おすすめの国を紹介する練習に取り組む。(世界遺産紹介)<br>“Where do you want to go?” “I want to go to ~.”    |      | ワールドカフェで互いに自分のおすすめする国を伝え合う中で、児童が表現方法を学び合ったり互いのことを知ったりして、協働のよさを感じるようにする。 <u>ア-(ウ)</u> , <u>イ-(ア)</u>   |
| 4 | おすすめする理由や説明に必要な表現を書く練習に取り組む。                                                      |      | 児童が自分のおすすめする国や自分の気持ちや考えを伝える様々な表現の中から選び、書き写せるようにする。 <u>ア-(ア)</u>                                       |
| 5 | プレゼンテーションの準備をする。                                                                  |      | 児童がおすすめする国が同じ者のグループ活動の中で協働し、様々な表現方法を学べるようにする。 <u>イ-(ア)</u>                                            |
| 6 | 1回目のプレゼンテーションをする。                                                                 |      | 児童が情報や自らの考えを伝え合う中で、真似をしたい表現等を学び、互いに高め合えるようにする。 <u>イ-(ア)</u> , <u>ウ-(ア)</u>                            |
| 7 | ALT にプレゼンテーションをし、単元の振り返りをする。                                                      |      | 児童がALTに自分の英語が伝わった喜びを体感できるように、ALTと事前打ち合わせをする。 <u>ウ-(ア)</u>                                             |

| 時 | 目標：立体の特徴を学ぶ。 | 学習活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 【視点 2】(ウ)に関する工夫 |
|---|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|
| 1 |              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「立体を探そう」<br/>CLIL (算数) <u>ウ-a</u></li> <li>・立体の英語の確認 <u>ウ-b</u><br/>Cube/Pyramid/ Sophia Rectangular prism/Cone /Cylinder</li> <li>・側面の形(図形)から立体を推測 <u>ウ-c</u></li> <li>・“<u>Can you find ~?</u>”<br/>“What shape is this?”<br/>“<u>It is ~.</u>” <u>ウ-b</u></li> <li>・立方体の展開図作り <u>ウ-c. d</u></li> </ul> |                 |
| 2 |              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「人間立体に挑戦」<br/>CLIL (算数, 体育とも関連) <u>ウ-a</u></li> <li>・“<u>Can you make ~?</u>”<br/><u>ウ-b</u></li> <li>・立体を表す表現活動(グループ活動) <u>ウ-c. d</u></li> <li>・Big Rectangular Prism (全員) <u>ウ-c. d</u></li> </ul>                                                                                                      |                 |
| 3 |              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「地域や国内外の立体物を見てみよう」<br/>CLIL (算数, 社会とも関連) <u>ウ-a</u></li> <li>・“What shape is this?”<br/>“<u>Can you find ~?</u>”<br/><u>ウ-b</u></li> <li>・立体クイズ <u>ウ-c</u></li> <li>・写真(世界遺産, 鹿児島で立体探し) <u>ウ-c. d</u></li> </ul>                                                                                          |                 |

“You can ~.” “Can you ~?”の言語材料の活用・世界遺産を題材として活用

### (3) 検証授業Ⅰ（外国語科の授業）の実際

【視点1】内発的動機を高める学習方法の工夫における具体的な手立てを行った。実際は、次のとおりである。

#### ア 自律性を高める工夫

- (ア) 児童が学習内容を自己決定できる単元目標の工夫を図る。1-ア-(ア)

児童が自分の気持ちや考えを基に伝えたい内容を選んで自己決定できるように単元目標の工夫をした。英語でのコミュニケーションをする目的、場面、状況を明確にし、児童が「自分の考えや気持ちを伝えたい。」と英語を使いたくなるようにした。

外国語科の授業の単元目標ではALTの「コロナが落ち着いたら日本以外の海外旅行に行きたいが、行き先を決められずにいる。おすすめの国を教えてください。」という内容の動画を児童に見せた。困っているALTのために児童自身が本当に行ってみたい好きな国をおすすめする姿が見られた。

- (イ) 児童に言語活動の方法を決定させたり、見通しをもたせたりする工夫を図る。1-ア-(イ)

おすすめの国をどのような方法で伝えるか、単元最後の言語活動の方法を児童と話し合っ

- (ウ) 児童が学習方法を選択できる工夫を図る。1-ア-(ウ)

教師は「英語での伝え方が分からない際にどのような方法で学習するか。」と児童に問い、児童が答えた自分に取り組みやすい学習方法を選んで学べるようにした。児童は伝えたい表現を探すために教科書やタブレットで調べたり、活動している相手や教師に尋ねたりして、自分に適した学習方法を選びながら学習した。

#### イ 関係性を高める工夫

- (ア) 児童がペア・グループ活動を通して協働のよさを感じられる工夫を図る。1-イ-(ア)

児童同士の関係性を高めるための協働ができる言語活動として、より多くの友達とやり取りができるワールドカフェ風の交流活動とプレゼンテーションを行った（資料19）。交流活動では児童が自分の行きたい国を互いに伝え合う活動を通して、やり取りをする相手の行ってみたい国やその理由を知り、どのような表現方法を使えばよいかを学び合うとともに「〇〇くん、

エジプトに興味あるんだ。」と友達の新たな一面を知る機会となった。また、プレゼンテーションではグループの友達と一緒に取り組むことで、互いに助け合いながら安心して発表する児童の様子が見られた（資料20）。

#### 資料19 ワールドカフェの説明

ワールドカフェとはカフェのようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれたテーブルで自由な対話を行い、外のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を集めることができる対話手法の1つ。（ワールド・カフェの手引き SPOD フォーラム 2012 より）

#### 資料20 協働する活動を通して関係性を高める児童の姿



## ウ 有能感を高める工夫

(ア) 児童が「できた。」，「分かった。」と感じられるフィードバックの工夫を図る。

### 1-ウ-(ア)

有能感を高めるためのフィードバックとして、聞き手である児童が発表者の児童に「いいな。」と思う表現や真似したい表現をプレゼンテーション後に伝えられるようにした。それに加えて、教師やALTが発表者に伝えたいことがしっかり伝わっていると分かるような反応を多くしたことで、発表した児童はより「伝えることができた。」と有能感を高めることができた。自由記述で「これまでは英語で伝えられなかったことが伝えることができるようになった。」と有能感を得られたと捉えられる内容を明記している児童が38人中16人見られた（資料21）。これらの記述から、児童が有能感を高められたのではないかと考えた。

資料 21 有能感を高められた児童の記述

|                                                                                                                                                        |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 私は、友達が行きたい国が分かるようになりました。出来るようになったことは、先生に友達に聞かずに行きたい国を言えたことです。初めて聞かずに言えたのでうれしかったです。家で英語で「どの国に行きたいですか」と聞けるようになったので、英語を話せるとうれしく、楽しいと思えたので、英語が大好きになりました。88 |
| 家の人に「どの国に行きたいですか?」以外にもいろいろ聞いてみたいと思いました。自信が持ててよかったです!!                                                                                                  |

## (4) 検証授業Ⅰ（「CLIL」の授業）の実際

【視点2】児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりの工夫は次のとおりである。

### ア 外国語科と他教科等の関わりについて 2-ア

他教科等の学習内容と外国語科で学習した語彙や表現を関連付ける工夫を図る。

CLIL(算数)で扱った学習内容は、児童が中学年で既に学習した立体の名称や特徴であり、立方体の展開図も既に学習している。検証授業Ⅰでは、その既習知識を基に発展的な内容にし、展開図探し、人間立体作り、世界遺産等の建築物から立体探しといった活動を通して、「どうして立体となるのか。」，「どうすれば立体となるのか。」について思考できるようにした。これは、Bloom(改訂版)の低次思考力の応用、高次思考力の分析、評価に当てはまる。また、Unit 3 “Let's go to Italy.”で学ぶ英語の表現を「CLIL」の授業でも活用できるようにした。

### イ 学習の目標について (p. 7 資料 17) 2-イ

「CLIL」の授業に関しては算数科の目標を設定し、体育科と社会科とも関連付けたため、体育科や社会科の内容も踏まえて目標を加えた。

### ウ 教材の設計について (四つの「C」) 2-ウ

四つの「C」を児童の実態に合わせる工夫を図る（資料22）。

資料 22 検証授業Ⅰにおける四つの「C」

| a : Contents                                                                                                                                      | b : Communication                                                            | c : Cognition                                                                              | d : Community                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>CLIL(算数)「立体を探そう」</li> <li>CLIL(算数, 体育とも関連)「人間立体に挑戦」</li> <li>CLIL(算数, 社会とも関連)「地域や国内外の立体物をみてみよう」</li> </ul> | 既習表現である図形の英語や外国語で学習した基本的表現を活用して、展開図探し、人間立体作り、立体探しといった活動をしなが、立体の特徴について学びを深める。 | 既習知識を基に、立方体の展開図がいくつできるかを考えたり、身体を使い様々な立体を作るにはどうしたらよいか考えたり、建築物の中にある立体を見つけ出したりすることができる(資料23)。 | グループ活動を通して互いの考えを基に学習活動に取り組むことで学びを深めたり、助け合ったりする中で互いを理解したり、よさを認め合ったりすることができる(資料24)。 |

### 資料 23 思考している児童の姿

|                                                                                   |                                                                                    |                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 展開図探し<br>CLIL（算数）                                                               | 2 人間立体作り<br>CLIL（算数，体育とも関連）                                                        | 3 立体探し<br>CLIL（算数，社会とも関連）                                                           |
|  |  |  |
| これじゃ <b>Cube</b> にならないから，この面はこっち側がいいね。                                            | <b>Corn</b> （円錐）の頂点にするために，つま先をピンとしてそろえよう。                                          | この長さとの長さは違うから， <b>Rectangular prism</b> になるよね。                                      |

### 資料 24 協働に取り組む児童の姿

|               |                                                                                     |                  |
|---------------|-------------------------------------------------------------------------------------|------------------|
| 人間立体作り        | 球に挑戦中                                                                               |                  |
| もう少し背中を丸くしよう！ |  | どうしたらいい？         |
| Cylinder(円柱)？ |                                                                                     | Sphere(球)かな？     |
|               | がんばれ！                                                                               | Hold each other！ |
| 考えを出し合う姿      | 励まし合う姿                                                                              | 協力し合う姿           |

#### エ 扱う言語材料について 2-エ

「CLIL」の授業を行う上で，扱う言語材料を三つのグループに分け，整理した。外国語科の授業で扱う基本的な表現（学びを深める中で想起される表現）と既習表現である中学年の外国語活動で扱った図形の語彙を活用することで，児童が新しく学ぶ未習の表現である立体の名称や特徴を推測できるようにした(資料 25)。

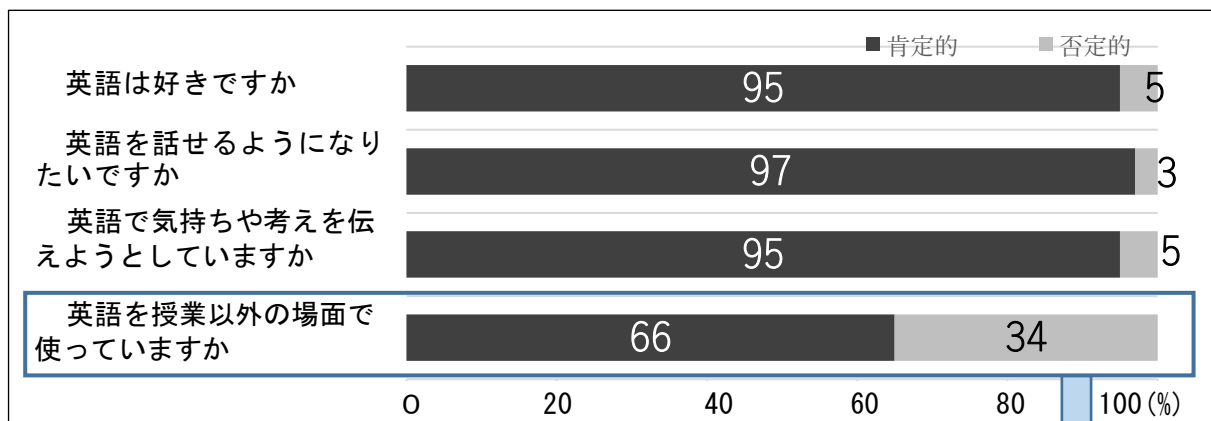
#### 資料 25 検証授業 I で扱った言語材料

|                                      |                                                                       |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 外国語科で扱った基本的な表現（学習の中で起される可能性のある語彙と表現） | “Can you find ～?” “You can find ～.”                                   |
| 既習語彙と表現（図形の名称）                       | triangle, rectangle, circle, square<br>※中学年外国語活動で既習                   |
| 未習語彙と表現（立体の名称・特徴）                    | 3D shapes, cube, pyramid, cylinder, corn<br>rectangular prism, sphere |

(5) 検証授業Ⅰ後の考察

検証授業Ⅰ後の調査結果（令和3年7月19日実施 本校第6学年1組38人対象，質問紙法）は，以下のとおりである。

資料26 検証授業Ⅰ後の実態調査の結果



検証授業Ⅰ後の実態調査（資料26）では，どの項目でも肯定的な回答の増加があった。英語で気持ちや考えを伝えようとしているかを問う質問では，90%を上回る結果であった。また，授業以外での英語の活用を問う質問では，42%から66%（38人中25人）と増加した（資料27）。自由記述では，「身体で立体を表現したから覚えやすく，面白かった。」，「三角形など知っている単語が出てきて分かりやすかった。」と体験的に英語を学んだり，既習内容を結び付けたりしている児童の様子が見られた。さらに，「自分の行きたい国の発音や言い方を教えてもらい言えるようになった。」

「自分の行きたい国を学ぶことで他の人の言っていることもよく分かった。」，「一つのこと（話す）を知ると，二つのこと（話すと聞く）ができると思った。」と自らの学びを振り返り，有能感を得ている児童の様子が見られるようになった。

次に，検証授業Ⅰにおける成果と課題（検証授業Ⅰ後実態調査結果，行動観察より）を示す。

【視点1】内発的動機を高める学習方法の工夫の成果は，以下のとおりである。自律性，関係性，有能感の三要素に重点をおいた工夫の成果を示す。

ア 内発的動機を高める学習方法の工夫

(ア) 自律性を高める工夫

単元1時間目に学習内容や単元最後の言語活動を児童が自己決定できるようにしたため，単元を一貫して粘り強く学習に取り組む児童の姿が見られた。授業外での英語の活用が増加していることから，自ら英語を活用する児童が増加したことが分かった。

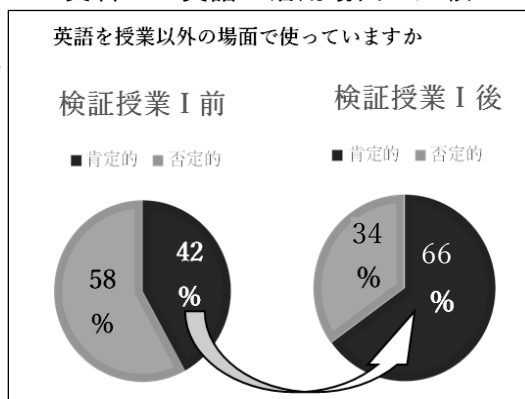
(イ) 関係性を高める工夫

84%（38人中32人）の児童が「分からない時に助け合えてよかった。」などと協働することのよさを表す内容を記述した。プレゼンテーションの練習や本番においても互いに教え合ったり，補助したりする児童の姿が見られた。

(ウ) 有能感を高める工夫

84%（38人中32人）の児童が振り返り用紙の自由記述に「プレゼンテーションでおすすめしたい国を発表できた。」，「おすすめしたいことがあったときにどのような表現を使えばよいか分かった。」など児童が「できたこと」，「分かったこと」を明記した。また，今後英語で学習したいことを記述できた児童は86%（38人中33人）いた。

資料27 英語の活用場面の比較



【視点2】児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりの成果は、次のとおりである。検証授業Ⅰでは、四つの「C」を児童の実態に合わせることでできたかをみる。

ウ 四つの「C」について

a : Content (学習内容)

95% (38人中36人) の児童が「CLIL」の学習に取り組むすいと回答した。振り返りでは「ちょっと難しかったけど、面白かった。」と少し難しさを感じながらも学習の面白さについて記述する児童が32% (38人中12人) いた。

b : Communication (コミュニケーション)

教師からの発問や指示は英語を多く活用したが、外国語科の授業で扱った基本的な表現や図形の名称といった既習語彙と既習表現から立体を示す未習表現を推測したり理解したりする児童の姿が見られた。児童同士のやり取りは、考えを出し合う際は日本語であったが、学習した立体や図形を表す単語は英語を活用していた。

c : Cognition (思考)

84% (38人中32人) の児童が「授業の中でたくさん思考した。」と回答した。学習活動では「どうすれば展開図が作れるか。」、「どうすれば立体が作れるか。」、「なぜ立体と言えるのか。」と既習知識を基に理由付けをしながら分析したり、応用したりして試行錯誤する児童の姿が見られた。

d : Community/Culture (協働/文化)

82% (38人中31人) の児童が友達と「よく協力した。」と回答した。展開図探し、人間立体、立体探しなどの活動では児童同士で声を掛け合い、よく助け合う姿が見られた。

検証授業Ⅰから見えてきたそれぞれの視点の課題は、次のとおりである。

【視点1】から見えてきた課題

外国語科の授業でプレゼンテーションに取り組む際、グループ活動で一人一文と役割分担をしたグループがあった。そのグループの児童の中には、自分の発表する一文のみを覚えたことで満足してしまい、より多くの語彙を活用しようとしたり、もっと練習しようとしたりする姿が見られない児童もいた。これは内発的動機を十分に高めることができなかった児童の姿だと捉える。

【視点2】から見えてきた課題

「CLIL」の授業の中で、元々、英語に対する苦手意識があった児童が、学習活動にグループ内の友達と助け合いながら取り組み、学習内容をよく理解して、楽しそうに活動に取り組んでいた。しかし、児童自身が「何ができるようになったか。」、「何が分かったか。」を認識しないまま学習を進めたため、英語に対する苦手意識が残ったことが調査結果より分かった。

また、検証授業Ⅰの「CLIL」の授業は、算数科の既習内容を扱ったが研究のための単元指導計画にない授業だったため、時数は創意の時間で確保した。一方、他教科等の時数で行う場合、教科や学習内容によっては、英語の語彙数が少ない児童が当該教科の学習内容を理解することは困難であると考えられた。

以上の課題を基に、検証授業Ⅱに向けての改善は次のように取り組む。

〈改善策1〉

外国語科の授業を「CLIL」に基づく授業にすることで時数を確保し、学習内容を児童の実態に合わせる工夫を図る。

〈改善策2〉(【視点1】の課題より)

児童の内発的動機を更に高めて、児童が英語を活用してやり取りの練習にもっと取り組むようになるような学習目標の工夫を図る。

〈改善策3〉(【視点2】の課題より)

児童と教師が学習内容と学習語彙の理解を明確に把握できるようにループリックを作成する。そのループリックの活用により、児童自身が「何ができるようになったか。」、「何が分かったか。」を認識し、英語に対する苦手意識を払拭できるように工夫を図る。

## V 検証授業Ⅱの実践と考察

### 1 検証授業Ⅱの概要

検証授業Ⅱは外国語科の授業と「CLIL」の授業を分けて行った検証授業Ⅰとは異なり、外国語科の授業を児童の実態に合わせた「CLIL」に基づいた授業にした（資料 28）。その外国語科の単元（Unit6）と総合的な学習の時間、社会科及び家庭科を関連付けた学習内容にした。

資料 28 検証授業Ⅱの授業の概要

|                                                                                    |                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 実施学年：鹿児島市立広木小学校第 6 学年 1 組 児童 38 人<br>実施時期：令和 3 年 11 月 11 日（月）～12 月 2 日（木）外国語科 7 時間 |                                                                                                                                |
| 「CLIL」に基づく外国語科の授業                                                                  |                                                                                                                                |
| 単元名                                                                                | Unit6 “Let’s think about our food.” (New Horizon6)                                                                             |
| 学習内容<br>2-ア                                                                        | CLIL（総合的な学習の時間と関連）：鹿児島の「食文化」について分かる。<br>CLIL（社会科と関連）：鹿児島の特産物とその産地が分かる。<br>CLIL（家庭科と関連）：鹿児島の特産物の三大栄養素が分かる。                      |
| 目標<br>2-イ                                                                          | ○ 鹿児島にいる外国人に鹿児島の特産物を使った郷土料理を紹介し、鹿児島の「食」文化に関して学びを深める。<br>○ 特産物を使った郷土料理を紹介する英語の表現や「食」に関する内容を尋ねる表現に慣れ親しみながら、自分の気持ちや考えを伝え合うことができる。 |
| 言語材料<br>2-エ                                                                        | 既習語彙と表現：食べ物や食に関する表現（中学年の外国語活動で既習）<br>未習語彙と表現：三大栄養素の表現<br>基本的な表現：Unit6 で扱う基本的な表現四つ（p25. 資料 38 参照）。<br>I ate ～. 等                |

### 2 検証授業Ⅱにおける視点と具体的な手立て

検証授業Ⅰで見えてきた課題を解決するために、ワークシートとルーブリックの活用を具体的な手立てに追加して検証を行った。検証授業Ⅰと重複する手立てに関しては省略し、検証授業Ⅱから追加された項目のみ説明をする。

#### (1) 検証授業Ⅱの視点（pp. 5-6 参照）における手立て

【視点 1】内発的動機を高める学習方法の工夫の手立ては、次のとおりである。

#### ア 自律性を高める工夫

(エ) 児童が考えや気持ちを伝えやすくするためのワークシートの工夫を図る。1-ア-(エ)

#### 追加項目

検証授業Ⅱで行う領域が「話すこと〔やり取り〕」となり、児童は即興的な英語でのやり取りをすることになった。検証授業Ⅰは領域「話すこと〔発表〕」で事前に万全の準備をすることができたが、検証授業Ⅱでは相手次第で話す内容や順序が変わってくることが想定された。即興的に対応できるように準備が求められたため、児童が ALT に自分の考えや気持ちを伝えるためにメモ代わりとなるワークシートが必要となった。児童が伝えやすくなるように、ワークシートを工夫して作成した。

#### ウ 有能感を高める工夫

(イ) 「CLIL」に基づいた授業用ルーブリックの活用の工夫を図る。1-ウ-(イ) 追加項目

児童が「何ができるようになったか。」「何が分かったか。」を実感できるようにするために、教師が指導と評価の一体化を図るためのルーブリックの作成と活用の工夫を図った。ルーブリックは「CLIL」に基づいた授業で活用するため、外国語科の評価項目（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）に加え、「CLIL」に基づいた項目も設定した。実際の記録に残す評価は担任が行うため、指導に生かすための評価として実施し、その結果は担任と共有した。

【視点2】「CLIL」に基づいた外国語科の授業づくりの手立ては、次のとおりである。

オ 評価について 2-オ 追加項目

外国語科で見取る評価項目に「CLIL」の授業で指針となる四つの「C」の項目を含めた内容を付け加えた。

(2) 検証授業Ⅱの指導計画

検証授業Ⅱの指導計画は次のとおりである。

外国語科の授業の単元全体を総合的な学習の時間と関連付けた「CLIL」の授業にする。さらに、2時間目を社会科、3時間目を家庭科と関連付けた「CLIL」の授業として設定する。単元全体の学習内容は鹿児島の「食」文化にした。これは、総合的な学習の時間で扱う郷土教育の内容である。特産物と産地については社会科の既習知識を、特産物の三大栄養素については家庭科の既習知識を生かして学べるようにする。CLIL（社会科と関連）と CLIL（家庭科と関連）の視点に対する手立ては、【視点2】のウ（四つの「C」）に整理して示す（p18. 資料29）。

検証授業Ⅱの指導計画と視点に対する手立て

| 時 | 項 目                         | 内 容                                                                                                                                                                                                       |
|---|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 目標                          | 学習のねらいをつかむ。【CLIL（総合的な学習の時間と関連）※4～7時間目同様】                                                                                                                                                                  |
|   | 学習活動                        | ①あいさつ→②Small Talk→③めあて→④I ate -Game.→⑤振り返り                                                                                                                                                                |
|   | 視点に対する手立て                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>児童が言語活動の内容を自己決定できるように、単元目標の工夫を図る。<br/>1-ア-(ア)</li> <li>児童が見通しをもって粘り強く学習に取り組めるように、単元最後の言語活動の方法を決定できるようにする。1-ア-(イ)</li> <li>児童の身近にある鹿児島の郷土料理を学習テーマにする。2-ア</li> </ul> |
|   | 評価計画<br>◎外国語<br>○学 習<br>内 容 | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈ループリック〉</p> <p>◎ “What did you eat?” で尋ねられ、“I ate Satsuma-age.” と正しく答えることができる。</p> <p>○ 鹿児島の特産品にどのようなものがあるかが分かる。</p>                                                                 |
| 2 | 目標                          | 特産品の産地を伝えられるようになる。【CLIL（社会科と関連）】                                                                                                                                                                          |
|   | 学習活動                        | ①あいさつ→②Small Talk→③めあて→④産地の表現確認→⑤振り返り・あいさつ                                                                                                                                                                |
|   | 評価計画                        | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈ループリック〉</p> <p>◎ “Kurobuta is from Kumage.” を正しく表現することができる。</p> <p>○ 鹿児島の特産品とその産地が分かっている。</p>                                                                                        |
| 3 | 目標                          | 三大栄養素について伝えられるようになる。【CLIL（家庭科と関連）】                                                                                                                                                                        |
|   | 学習活動                        | ①あいさつ→②Small Talk（昨晚の夕食について・栄養素について）→③めあて→④栄養素の表現の確認→⑤ “Kurobuta is in the red group.” game→⑥振り返り・あいさつ                                                                                                    |
|   | 評価計画                        | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈ループリック〉</p> <p>◎ “Kurobuta is in the red group.” を正しく表現することができる。</p> <p>○ 三大栄養素とその効果について分かっている。</p>                                                                                  |
| 4 | 目標                          | 紹介する郷土料理と特産品を決めよう。                                                                                                                                                                                        |
|   | 学習活動                        | ①あいさつ→②Small Talk(好きな郷土料理について児童同士でやり取り)→③めあて→④必要な表現の確認→⑤やりとりの練習Ⅰ→⑥交流で相互確認→⑦振り返り・あいさつ                                                                                                                      |

|   |           |                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|   | 視点に対する手立て | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童が伝えたいことを記入できるように、ワークシートを活用する。カタカナや日本語でも可など柔軟性の高いワークシートにし、自分で調べた英語や活用したい英語をメモできるようにする。1-ア-(エ)</li> <li>・ 児童と教師ができたことを把握するためにループリックを活用する。1-ウ-(イ), 2-オ</li> </ul>                                                   |
|   | 評価計画      | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈動画・ループリック〉</p> <p>◎ 紹介する郷土料理や特産品について、産地と栄養素を表す表現を正しく使うことができる。</p>                                                                                                                                                                      |
| 5 | 目標        | 外国人観光客に鹿児島県の「食」文化のよさを伝えられるようになる。                                                                                                                                                                                                                            |
|   | 学習活動      | ①あいさつ→②Small Talk (好きな郷土料理について児童同士でやり取り)→③めあて→④前時良かったペアの紹介→⑤やり取りの練習Ⅱ→⑥振り返り・あいさつ                                                                                                                                                                             |
|   | 視点に対する手立て | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童がやり取りの練習ができるように、選択できる学習方法 (ICT 機器活用) を増やす。1-ア-(ウ)</li> <li>・ 児童が協働・協学 (互いに言語不足を補える) できるように、3人組で練習に取り組めるようにする。1-イ-(ア)</li> </ul>                                                                                  |
|   | 評価計画      | <p>【話すこと〔やり取り〕思考・判断・表現】〈動画・ループリック〉</p> <p>◎ 紹介する郷土料理や特産品について、互いに尋ね合い、自分の気持ちや考えを伝え合っている。</p>                                                                                                                                                                 |
| 6 | 目標        | どうすればもっと外国人観光客に鹿児島県の「食」文化のよさを伝えられるか工夫する。                                                                                                                                                                                                                    |
|   | 学習活動      | ①あいさつ→②Small Talk (好きな郷土料理について児童同士でやり取り)→③めあて→④前時良かったペアの紹介→⑤やり取りの練習Ⅲ→⑥振り返り・あいさつ                                                                                                                                                                             |
|   | 視点に対する手立て | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童が伝えたいことを記入できるように、ワークシートを活用する。1-ア-(エ)</li> <li>・ 児童と教師が児童のできたことを把握するために、ループリックを活用する。1-ウ-(イ), 2-オ</li> </ul>                                                                                                       |
|   | 評価計画      | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈動画・ループリック〉</p> <p>◎ 紹介する郷土料理や特産品について、産地と栄養素を表す表現を正しく伝えることができる。</p>                                                                                                                                                                     |
| 7 | 目標        | 外国人観光客に鹿児島県の「食」文化のよさを伝える。                                                                                                                                                                                                                                   |
|   | 学習活動      | ①あいさつ→②Small Talk (好きな郷土料理について児童同士でやり取り)→③めあて→④ALT とやり取り→⑤振り返り・あいさつ                                                                                                                                                                                         |
|   | 視点に対する手立て | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ALT とやり取りをする際、児童が互いに言語不足を補えるように補助役を付けて取り組めるようにする。1-イ-(ア)</li> <li>・ 「英語が伝わった。」と児童が感じられるように、教師は ALT に肯定的なフィードバックをするように伝える。1-ウ-(ア)</li> </ul>                                                                        |
|   | 評価計画      | <p>【話すこと〔やり取り〕知識・技能】〈動画・ループリック〉</p> <p>◎ 紹介する郷土料理や特産品について、産地と栄養素を表す表現を正しく伝えることができる。</p> <p>【話すこと〔やり取り〕思考・判断・表現】〈動画・ループリック〉</p> <p>◎ 紹介する郷土料理や特産品について、互いに尋ね合い、自分の気持ちや考えを伝え合っている。</p> <p>【話すこと〔やり取り〕主体的に学習に取り組む態度】〈動画〉</p> <p>◎ 相互確認したことを自分の表現に生かすことができる。</p> |

資料 29 CLIL（社会科、家庭科と関連）の四つの「C」について 2-ウ

| a : Contents<br>2-ウ-a                                                                                                                                                                        | b : Communication<br>2-ウ-b                                                                                                                                        | c : Cognition<br>2-ウ-c                                                                       | d : Community<br>2-ウ-d                                                                                                   |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>鹿児島県の郷土料理と特産品を学習テーマに社会科（特産品と産地が分かる。）と家庭科（6特産品の三大栄養素が分かる。）を関連付ける。2-ア</li> <li>鹿児島県にいる外国人に鹿児島の特産物を使った郷土料理を紹介し、鹿児島の「食」文化について学びを深められるようにする。2-イ</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>英語で鹿児島の特産品を使った郷土料理を紹介することができるようにする。2-イ</li> <li>外国語科で扱う基本的な表現・既習語彙と表現（食べ物、色、大きさ、味など）・未習語彙と表現（三大栄養素）の把握をしておく。2-エ</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>児童がどうすれば外国人観光客に「食べてみたい。」と思わせるかを思考できるようにする。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>鹿児島の「食」文化について理解を深めることができるようにする。</li> <li>児童同士で教え合い、助け合い、高め合いができるようにする。</li> </ul> |

(3) 検証授業Ⅱにおける【視点1】の工夫の実際

【視点1】の内発的動機を高める学習方法の工夫の手立てを取り入れた外国語科の授業の児童の様子は、次のとおりである。

ア 自律性を高める工夫

(ア) 児童が学習内容を自己決定できる単元目標の工夫を図る。1-ア-(ア)

検証授業Ⅰでも児童が自分の気持ちや考えを伝えられるようにしたが、実際はその国のよさをよく知らないまま伝えている状況であった。そこで、今回は児童自身が実際に食べたことがあり、本当においしいと思っている鹿児島の郷土料理について伝えられるように単元目標の工夫を図った。まず、児童に近年鹿児島県の奄美大島が世界遺産登録に認められ、これまでの屋久島や仙巖園等、明治日本の産業革命遺産も含めると有数の世界遺産を有する観光県であることを伝えた。それに伴い、新型コロナウイルス感染症が広まる前は海外からの大型客船が寄港したり鹿児島空港の主にアジア諸国と結ぶ国際便の増便があったりして外国人観光客が増加傾向にあったこと、外国人観光客が鹿児島の郷土料理に挑戦してみたいと思っていることなどを伝えた。

児童は鹿児島の魅力を改めて感じ、もっと多くの外国人に鹿児島のよさを知ってもらいたいという思いを抱いた。そして、鹿児島を訪れる外国人観光客の多くがアジア圏であり英語を母語としないことから、自分たちがこれまでに学習してきた英語でのコミュニケーションで十分に相手に自分の考えや気持ちを伝えられることに気付いた。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いて、また自由に海外旅行ができるようになると、多くの外国人が鹿児島を訪れることが十分に考えられる。そのように考えた児童から「『鹿児島に来てよかった。鹿児島の料理がおいしかった。また来たいね。』と思ってもらえるといいな。」という声が挙がった。

そこで、「外国人に食べてみたいと思ってもらえるように鹿児島の郷土料理について伝えよう。」という学習目標を設定し、本当に児童自身が食べておいしいと思った郷土料理を鹿児島にいる外国人に伝えられるようにした（資料30）。

資料30 学習内容を自己決定する児童の姿

**Kagoshima**

外国人観光客  
839,900人（令和元年） 830,540人（平成30年）

Good Food・Beautiful Nature・History

鹿児島に来る外国人はどこ出身かな？

- 1位 Hong-kong
- 2位 Korea
- 3位 Taiwan
- 4位 China
- 5位 U.S.A
- 6位 Singapore
- 7位 England
- 8位 その他

英語を母語としない外国人が多いな。ということは、相手にも分かりやすい簡単な英語でやり取りしたらいいね！

自分の好きな鹿児島の郷土料理を外国人に食べてみたいと思ってもらえるように、伝えよう。

(イ) 児童に言語活動の方法を決定させたり、見通しをもたせたりする工夫を図る。1-ア-(イ)

まず、教師は単元1時間目に「単元の最後に行う言語活動は、実際に一対一でALTとやり取りを行う」ことを児童に伝えた。そして、児童が「何分間やり取りをするか」、「補助役を付けて助け合うか、一人だけでやり取りをするか」など言語活動の具体的な方法を決定できるようにした。結果、児童は目安の時間は2分程度にして正確な時間の制限はなしにすることで、補助役を付けてやり取りをすることを決定した。単元最後の言語活動を意識させることで、実際のやり取りだどのような感じになるかをデモンストレーションしたり、資料31の「きっと旅行で疲れているから元気が出るものを食べたいはず。」という発言のように相手意識をもってやり取りしようとしたりする児童の姿が見られた。また、「英語でやり取りする際に、どのようなやり取りになるのか分からない。」と児童から質問を受けてから、ALTと教師のやり取りの動画を見せた。児童の状況に応じて教師の指導を受けることで、本番までの見通しをもちながら粘り強く学習を進める児童の姿が見られた（資料31）。

#### 資料31 単元最後の言語活動を意識することで学習の見通しをもつ児童の姿

〈児童に与えた情報〉

- ① 鹿児島県の郷土料理について知りたがっている ALT（観光客役）が3人参加すること
- ② 一対一のやり取りになること
- ③ 単元最後の言語活動の Goal

〈ALTに自分のおすすめする鹿児島の郷土料理を「食べてみたい。」と思ってもらえるようにすること〉

〈児童が決定できるようにしたこと〉

- ① 補助役を付けるかどうか。② やり取りの時間設定はどうするか。

【自分たちでどんなやり取りになりそうかデモンストレーションを行う児童】  
ちょっと1回、日本語で自然なやり取りになるようにやってみよう。

旅行で来ているなら疲れているから、元気が出るものが食べたいはず。栄養があって元気がでることを伝えよう。

きっと相手は鹿児島の地元の人が普段食べている郷土料理に挑戦したいんじゃないかな？普段よく食べることを伝えよう。

どんな味なのか知りたいはず。甘いとか辛いとか伝えよう。

【英語でやり取りをしようとするが表現方法に困る児童】  
なんとなくやり取りの内容はつかめたぞ。でも、英語で伝えるにはどうするの？

児童が英語で表現するためにはどうしたらよいのかを考え始め、教師が行ったやり取りのモデルが必要になってから動画を紹介した。



教師が行ったやり取りのモデル

【学習の見通しをもつ児童】  
なるほど！英語でするとこんな感じなんだな。



(ウ) 児童が学習方法を選択できる工夫を図る。1-ア-(ウ)

児童が単元最後の言語活動を意識し見通しながら学習を進めるに当たり、検証授業Ⅰでは学習方法の選択肢になかった ICT 機器を活用した学習方法が必要になった。「授業以外でも音声を何度も聞き返したい。」「自分の英語が相手に通じるかを確認したい。」という児童が現れ、「ロイロノート school (以下、ロイロノート)」<sup>7)</sup>を用いた ICT の活用を図ることにした。また、「帰宅後に英語を話す練習をしたいが相手がいないためにどうすればよいか分からない。」という児童がいたため、人形を使ったやり取りの練習方法を伝えた。

「もっと学習をしたい。」と意欲が高まった児童は、音声機能を使って練習したり、動画機能を使用して教師に送信して助言を求めたりする姿が見られた(資料 32)。

#### 資料32 学習方法を選んで取り組む児童の姿

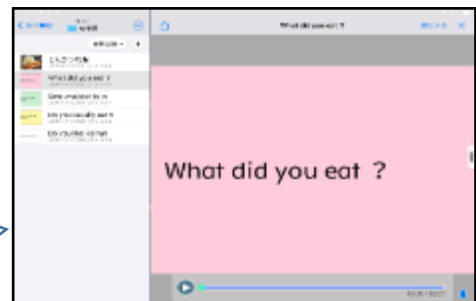


##### 【授業以外で練習する方法を探る児童】

もっと英語でのやり取りの練習ができるとよいのにな。  
先生に自分の英語を聞いてもらいたいな。よい方法はないかな？

##### 【①ロイロノートの音声機能を活用】

ロイロノートの資料箱に Unit6 のフォルダーを作成し、基礎的な表現の音声を録画したものを児童が帰宅した後でも、自由に聞いて自主学習ができるようにした。



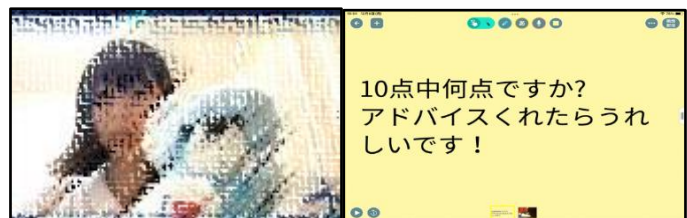
児童に配信した基本的な表現の録音

##### 【②ロイロノートの動画機能を活用】



やり取りの練習の仕方を紹介した動画

帰宅後に一人で練習する際には、ぬいぐるみを使って一人二役をしながら練習することができると伝え、やり取りの練習の仕方を撮影した動画をロイロノートで送信した。練習に取り組みたい児童は自由に活用できるようにした。



児童用タブレットを使って撮った動画を返送し、助言を求める児童の姿

「もっと練習をしたい。自分の英語が伝わるかを確認したい。」と内発的動機が高まった児童は自分で撮った動画を教師に送り、助言を求めるようになった。

7) 「ロイロノート school」は株式会社 LoiLo のアプリである。

(エ) 児童が考えや気持ちを伝えやすくするためのワークシートの工夫を図る。1-ア-(エ)

児童が自分の考えや気持ちを伝えやすくするために、ワークシートを作成した。自分が食べて本当においしいと思う郷土料理について児童が思いついたことを記入できるよう余白を多くとり、柔軟性を高めたワークシートにした。やり取りの練習を重ねるうちに、友達の表現方法で真似したいと思うような英語の表現があった際、児童がその都度付け加えて記入できるようにした。また、自分が伝えたい英語が分からない場合、級友や教師に尋ねたり、タブレットで調べたりしたことをメモとして活用できるようにした。教師が記入の仕方などを細かい指示は出さず、児童自身が自分で活用したい英語を記入したり、やり取りをする際に効果的に活用したりできるようにした（資料33）。

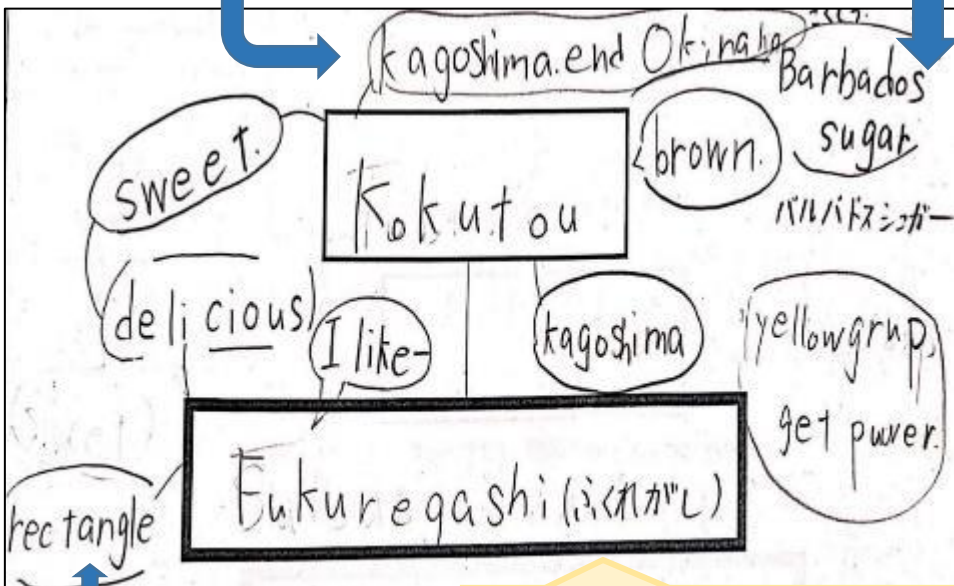
### 資料33 児童が自分の気持ちや考えを記したワークシートと感想



私は「ふくれがし（資料9）」について伝えたい！黒糖（黒砂糖）は鹿児島の特産物だ！英語では何と言うのかな？色は茶色だ。味は甘いよね。形は細長い。鹿児島もだけど沖縄でも有名だから、それも付け加えよう。

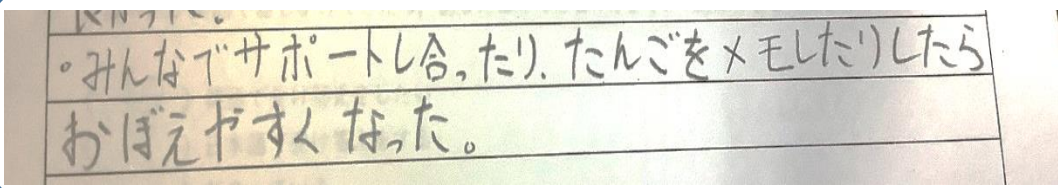
鹿児島だけでなく沖縄も産地だということを伝えたい。

黒砂糖って Barbados sugar と言ったね。自分で調べたよ。



「細長い」と言いたい！  
Rectangle って習ったな。

私は「ふくれがし」が好きだから、これを伝えよう！



みんながサポートし合ったり、たんごをメモしたりしたら  
おぼえやすくなった。

### ワークシートに関する児童の感想

「ふくれがし」とは、南九州地方にある郷土菓子で、黒砂糖風味の褐色の蒸しパン風の菓子のこと



資料9 ふくれ菓子

## イ 関係性を高める工夫

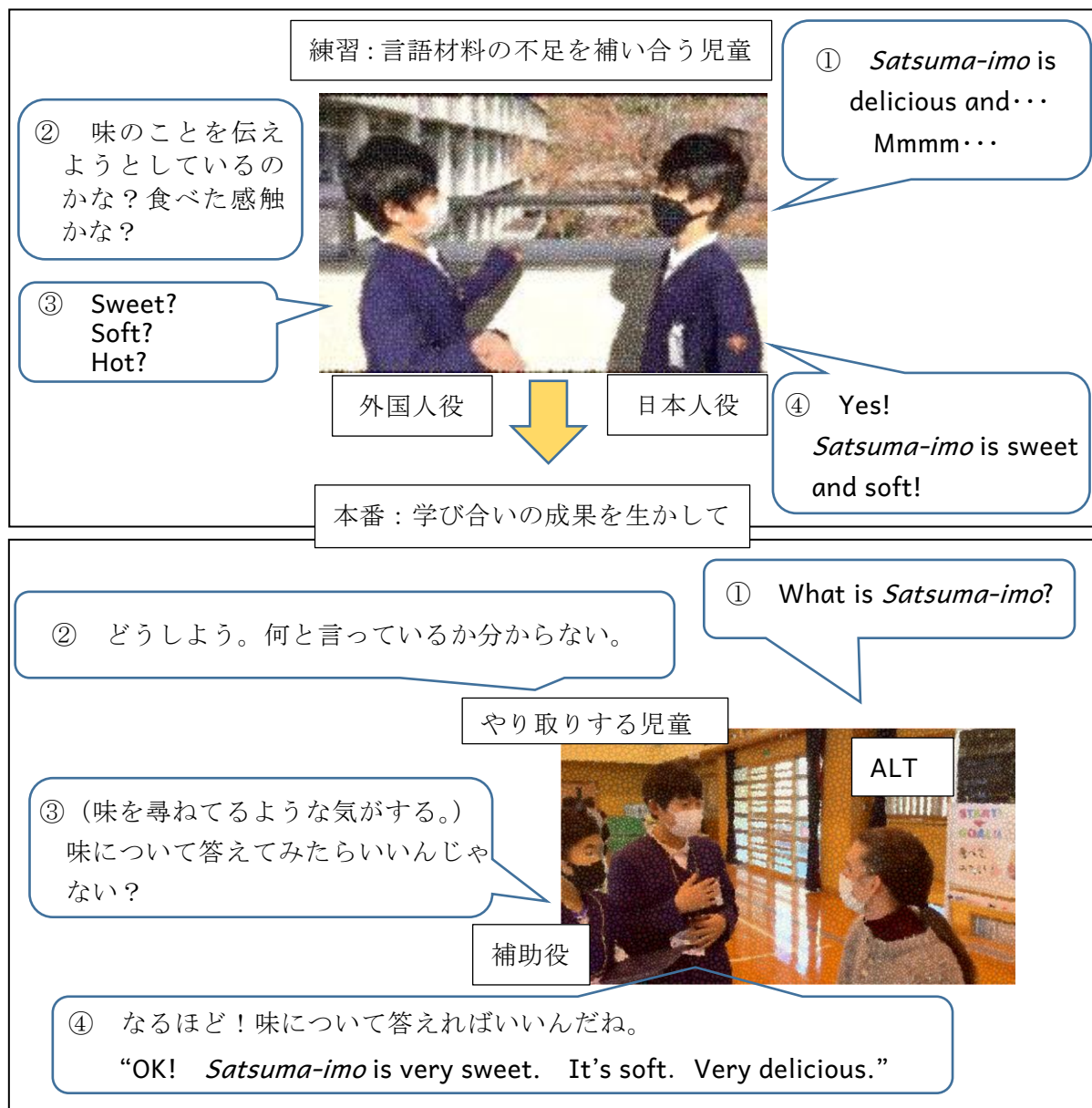
(ア) 児童がペア・グループ活動を通して協働のよさを感じられる工夫を図る。1-イ-(ア)

児童同士で協働や協学ができるように言語活動の工夫を図った。児童同士でやり取りの練習をする際、3人組でそれぞれ鹿児島にいる外国人役、日本人役、カメラマン役を決め役割交代をしながら、鹿児島の郷土料理についてやり取りをする練習に取り組ませた。協働・協学のポイントとして、互いに教え合うこと、助け合うこと、高め合うことの三点をおさえ、やり取りをできるだけ長く続けるように伝えた。

練習では、日本人役の児童が鹿児島の郷土料理について伝えようとするが、言語材料が不足しているためにうまく表現できない際は、外国人役の児童が「何を伝えようとしているのか」を想像し、ヒントを出すことで英語でのやり取りを補助する姿が見られた。また、逆に外国人役の児童が「どこで食べられるのか。」と質問をし、日本人役の児童が「天文館で食べられる。」と答えるなど、即興的なやり取りを互いに助け合いながら楽しむ児童の姿が見られた。

本番では、ALTを相手に即興的な英語のやり取りの中で、何を伝えようとしているか分からない状況になった際、補助役の児童が言語材料を提案するなどの補助をする姿が見られた(資料34)。

資料34 協働(協学)する児童の姿



ウ 有能感を高める工夫

- (ア) フィードバックの工夫においては、検証授業Ⅰと同じような成果が見られた。1-ウ-(ア)  
 (イ) 「CLIL」に基づいた授業用のルーブリックの活用を図る。1-ウ-(イ)

奥野<sup>8)</sup> (2018) は『CLIL』の評価は、『学習の評価』だけではなく『学習としての評価』が含まれている。学習指導要領の中でも指導と評価の一体化について述べられているが、「CLIL」においても、『学習としての評価』とは学習者が自律的に自己評価やピア評価（学習者同士でお互いに評価）すること自体が学習だという考えに基づいている。よって、授業と評価は表裏一体である。」と示している。そこで、児童自身で評価を行えるような形式にし、「CLIL」に基づいた授業を通して児童自身が「どのようなことを学び、どのような力を身に付けることができたか」を把握できるようにした（資料35）。

資料35 「CLIL」に基づいた授業用のルーブリック

| 【「CLIL」に基づいた授業用ルーブリックの特徴】                                                                        |                                  |                               |                                 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| ① 四つの「C」を基に項目を立てる。<br>② 外国語科の評価規準を設定する。<br>③ 児童自身でできた項目にチェックを入れられるようにする。<br>・ 振り返りをする際には動画を確認する。 |                                  |                               |                                 |
| 学習<br>内容                                                                                         | Content（学習内容）をみる項目               |                               |                                 |
| 言語                                                                                               | 【正確に言えたよ】<br>(知識・技能)             | 【英語で伝えられたよ】<br>(思考・判断・表現)     | 【自信がつくまで練習したよ】<br>主体的に学習に取り組む態度 |
| ◎2<br>points                                                                                     | ◎ 4つの文のうち3つ以上は正しく言えたよ            | ◎ 郷土料理にある特産物を2つ以上紹介できたよ       | ◎ 自分で伝えたい内容の英語を調べて、練習して、使ったよ    |
| ○1<br>Point                                                                                      | ○ 4つの文のうち1つから2つは正しく言えたよ          | ○ I like-.It-など知っている英語を1つ使ったよ | ○ 自分で伝えたい内容の英語を調べて、練習したよ        |
| △0<br>point                                                                                      | △ 4つの文のうち1つも正しく言えてなかったよ          | △ 特産物を1つも紹介できなかったよ            | △ 自分で伝えたい内容の英語を調べたよ             |
| 思考                                                                                               | Cognition（思考）をみる項目               |                               |                                 |
| 協学                                                                                               | Community/Culture（協働・協学/文化）をみる項目 |                               |                                 |

8) 奥野由紀子 『日本語教師のための CLIL 入門』 2018 年 凡人社

(4) 検証授業Ⅱにおける【視点2】の工夫の実際

【視点2】の外国語科の授業を児童の実態に合わせた「CLIL」に基づいた授業づくりの工夫は、「CLIL」に基づいた授業づくりをするために他教科等との関わりや四つの「C」、学習の目標や扱う言語材料、評価の仕方や指導計画（pp.16-18 参照）において工夫を図った。

ア 外国語と他教科等の関わりについて（資料36） 2-ア

資料36 他教科との関わり

【指導案での記載内容】※Gane はサツマイモの天ぷらであるガネのこと（p25. 資料41 参照）  
 “What did you eat last night?” “I ate *Gane*.” “Do you usually eat *Gane*?” “I usually eat *Gane*.”のやり取りを使いながら，“*Satsuma-imo* is from Kagoshima.” “*Satsuma-imo* is in the yellow group.”で特産品紹介を行い、鹿児島県の郷土料理と特産品をテーマに社会科（鹿児島県の特産物）と家庭科（三大栄養素）の内容を学ぶ。

| 外国語 Unit6 Let's think about food.                                                                                                                                                                               |                                                                                                                  |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>【5年生社会科】<br/>           （6月下旬から10月上旬）<br/>           ② 私たちの生活と食料生産<br/>               1 暮らしを支える食料生産<br/>               2 米作りのさかんな地域<br/>               3 水産業のさかんな地域<br/>               4 これからの食料生産とわたしたち</p> | <p>【6年家庭科】<br/>           （10月下旬から11月上旬）<br/>           6 くふうしようおいしい食事<br/>               ・ バランスのよいこんだてを考えよう</p> |

イ 学習の目標について 2-イ

「CLIL」に基づく授業づくりでは、学習内容と外国語科の二つの目標を立てた。学習内容は、学習テーマを鹿児島の「食」文化とし、社会科と家庭科に関連した内容の目標にした。外国語科の目標は、扱う基本的な表現と言語材料を基に、児童が自分の考えや気持ちを伝えられるようにした。

○ 学習内容（総合的な学習の時間、社会科、家庭科と関連）

鹿児島を訪れた外国人観光客に鹿児島の特産品を使った郷土料理を紹介し、鹿児島の「食」文化に関して学びを深める。

○ 外国語科の目標

特産品を使った郷土料理を紹介したり、「食」に関する内容を尋ね合ったりして、自分の考えや気持ちを伝え合うことができる。【話すこと〔やり取り〕】

ウ 四つの「C」について 2-ウ

教材の設計では、四つの「C」にそれぞれ整理した（資料37）。

資料37 検証授業Ⅱにおける四つの「C」

| a: Content<br>(学習内容)                                                                         | b: Communication<br>(コミュニケーション) | c: Cognition<br>(思考)                | d: Community/Culture<br>(協働・協学/文化)              |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------------------|
| <p>【社会科】<br/>           特産品とその産地が分かる。<br/>           【家庭科】<br/>           特産品の三大栄養素が分かる。</p> | 英語で鹿児島特産品を使った郷土料理を紹介することができる。   | どうすれば外国人観光客に「食べてみたい」と思わせられるかを思考できる。 | 自文化である郷土の「食」に関して理解を深めることができる。教え合い、助け合い、高め合いがある。 |

## エ 扱う言語材料について 2-エ

小学校の外国語活動・外国語科における言語学習では、本単元で児童に確実に身に付けさせたい基本的な表現と活用する中で必要となる既習語彙、外国語科の授業では扱っていない未習語彙を事前に把握することが重要である（資料38）。単元最後の言語活動で想定されるやり取りを基に扱われるだろう言語材料を整理した（資料39）。未習である三大栄養素を表す表現は、既習表現を基に児童が推測できるようにした（資料40）。

資料 38 検証授業Ⅱで扱う言語材料

|        |                                                                                                                                                                                                    |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 基本的な表現 | What did you eat? ①I ate “ <i>Gane</i> .”(資料 41)”<br>What do you usually eat? ②I usually eat “ <i>Gane</i> .”<br>③ “ <i>Gane</i> ” is from Kagoshima. ④ <i>Satsuma-imo</i> is in the yellow group. |
| 既習語彙   | 特産品を紹介する語彙：potato, fish, pork, meat, vegetable, radish, chicken<br>色や大きさを表す語彙 black, brown, white, big, small<br>味を表す語彙 delicious, sweet, spicy<br>値段を尋ねる：How much? It is - yen                    |
| 未習表現   | 三大栄養素：身体を作るもとになる building the body.<br>身体の調子を整えるもとになる condition the body.<br>エネルギーのもとになる the basis of energy.                                                                                      |

資料39 検証授業Ⅱの単元最後の言語活動で想定されるやり取り

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>【モデルスキット】</p> <p>※①⇒鹿児島にいる外国人 ②⇒日本人</p> <p>① Please tell me about Kagoshima-food!</p> <p>② I ate <i>Gane</i>. I like <i>Gane</i> (資料 41) .<br/><i>Gane</i> is delicious.</p> <p>① Do you usually eat <i>Gane</i>?</p> <p>② I usually eat <i>Gane</i>.<br/><i>Satsuma-imo</i> is in <i>Gane</i>.</p> <p>① Wao!<i>Satsuma-imo</i> is in <i>Gane</i>.</p> <p>② <i>Satsuma-imo</i> is from Kagoshima.<br/><i>Satsuma-imo</i> is in the yellow group.<br/>You can get power.</p> <p>① I can get power.</p> <p>② <i>Satsuma-imo</i> is sweet.</p> <p>① I want to try <i>Gane</i> and <i>Satsuma-imo</i>!</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

資料40 三大栄養素の未習表現を推測させるための表現

|                                                                                                                                              |                                                                                                                                                |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>The red group</b></p> <p>You can grow up!</p>       | <p><b>The green group</b></p> <p>You can be healthy!</p>  |
| <p><b>The yellow group</b></p> <p>You can get power!</p>  |                                                                                                                                                |

資料 41 ガネ

*Gane* はサツマイモの天ぷらであるガネのこと。カニに似ていることから鹿児島弁でカニを表す「ガネ」という呼称がついた。



## オ 評価について 2-オ

「CLIL」では言語学習だけではなく、学習内容の理解や学習目標を達成するための思考や協学等のねらいもあるため、外国語科で見取る言語学習の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準に加え、学習内容や思考、協働・協学等「CLIL」に基づいた項目を付け加えた（資料 42）。また、この評価は指導を生かすための評価であり、記録に残す評価を行う担任と共有した。

資料42 「CLIL」に基づいた授業における評価規準

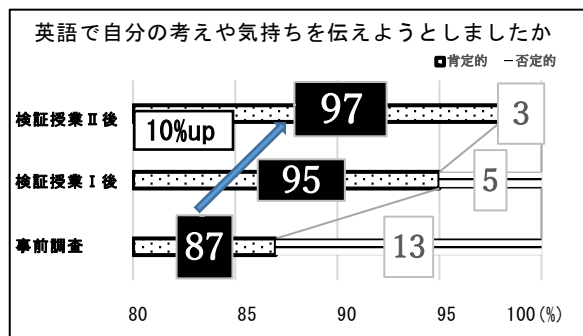
|                  | 知識・技能                                                                                                                                                                                                                                                         | 思考・判断・表現                                                                                                     | 主体的に学習に取り組む態度                                                                                                   |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 言語学習「話すこと（やり取り）」 | <p>(知識)</p> <p>“I ate ～.” “I usually eat～.”や“～ is from ～.” “～ is in the ～ group.”を用いて、食料品や料理について、伝え合う表現を理解している。</p> <p>(技能)</p> <p>知識を使って“I ate ～.” “I usually eat ～.”や“～ is from ～.” “～ is in the ～ group.”を用いて料理や食料品について自分の考えや気持ちを伝え合うための必要な技能を身に付けている。</p> | <p>鹿児島を訪れる外国人観光客が「鹿児島の郷土料理を食べてみたい。」と思うように、特産品を使った郷土料理を紹介する内容を整理して表す簡単な語句や基本的な表現を用いて、互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。</p> | <p>鹿児島を訪れる外国人観光客が「鹿児島の郷土料理を食べてみたい。」と思うように、特産品を使った郷土料理を紹介する内容を整理して表す簡単な語句や基本的な表現を用いて、互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。</p> |
| 学習内容             | <p>鹿児島の郷土料理にはどのような特産品が使われているかを知り、その栄養素も踏まえて、外国人観光客に「鹿児島の郷土料理を食べてみたい。」と思ってもらえるように紹介することができる。</p>                                                                                                                                                               |                                                                                                              |                                                                                                                 |
| 協学協働             | <p>英語で分からない表現があった場合等に教え合っているか。</p> <p>やり取りの最中で、うまく情報のやり取りができるよう互いに助け合っているか。</p> <p>互いのよいところを伝え合い、高め合おうとしているか。</p>                                                                                                                                             |                                                                                                              |                                                                                                                 |

(5) 検証授業Ⅱの考察

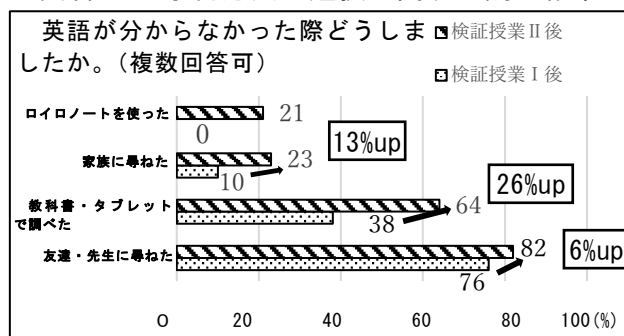
検証授業Ⅱにおける【視点1】の調査結果

(令和3年12月3日実施 本校第6学年1組38人対象、質問紙法)

資料43 英語の活用に関する調査結果



資料44 学習方法の選択に関する調査結果



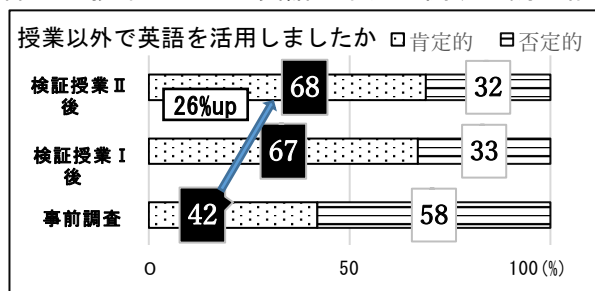
ア 自律性を高める工夫

「英語で自分の考えや気持ちを伝えようとしたか。」では、97%（38人中37人）の児童が肯定的な回答をした（資料43）。また、「英語が分からなかった際どうしましたか。」では、全ての学習方法において増加し、自分に適した学習方法で学ぼうとする児童の姿が多く見られた（資料44）。検証授業Ⅰ後の課題にあった「現状に満足してしまい、より多くの語彙を活用しようとししない児童の姿」とは異なり、自ら多くの語彙を活用しようとする自律した児童の姿がよく見られた。

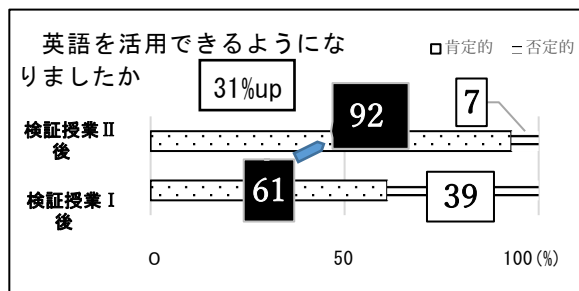
イ 関係性を高める工夫

「授業以外で英語を活用しましたか。」では肯定的な回答が68%（38人中26人）となり、26%の増加が見られた（資料45）。「休み時間等に児童同士でやり取りの練習に取り組んだ。」と振り返りで記述している児童も38人中13人いた。また、「ALTとやり取りをする際、補助役の友達が助けてくれたので嬉しかった。」と振り返りに22人の児童が、記入していた。

資料 45 授業以外での英語の活用に関する調査結果



資料 46 有能感に関する調査結果



## ウ 有能感を高める工夫

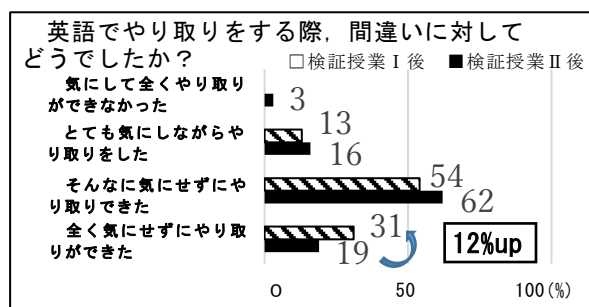
「英語を活用できるようになりましたか。」では検証授業Ⅰ後より31%増し、92%（38人中35人）と大きな伸びが見られた。児童は英語の活用に自信を高められたと考える（資料46）。

### 検証授業Ⅱにおける【視点2】の調査結果

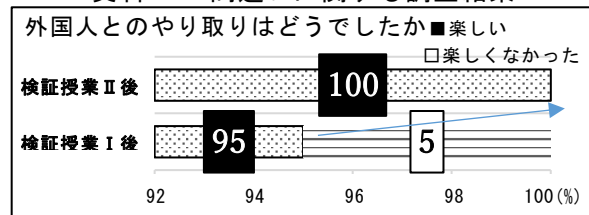
「CLIL」の授業を通して、どのように児童が変容したかを見る。「英語でやり取りをする際、間違いに対してどうでしたか。」では「気にせずやり取りができた。」と回答した児童が31%（38人中12人）となり、検証授業Ⅰ後より12%の増加が見られた（資料47）。また、「外国人と英語のやり取りはどうでしたか。」では、検証授業Ⅱ後の調査結果では100%の児童が「楽しかった。」と回答し、ALTとの英語でのやり取りに満足していることが分かった（資料48）。「自分からALTに話し掛けましたか。」では「どんどん話し掛けた。」と回答した児童は45%（38人中17人）となり、検証授業Ⅰ後より28%の増加が見られた（資料49）。「外国人が英語で話し掛けてきたらどうしますか。」では、「英語で話す。」と回答した児童は87%（38人中33人）であり、外国人と積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が見られた（資料50）。

これらの結果から、「CLIL」に基づいた授業づくりにより児童は外国語使用の「正確さ」よりも「伝わっている」ことを重要視し、外国語使用の不安軽減につなげることができた。加えて、児童同士が互いに自分の気持ちや考えを英語で伝え合う中で、英語によるコミュニケーションに対して自信を高めることができ、ALTとのやり取りを楽しむことができたと考える。そのため、外国人とのコミュニケーションに対して、英語で受け答えをしたいと英語の活用に対して意欲的になったと考える。

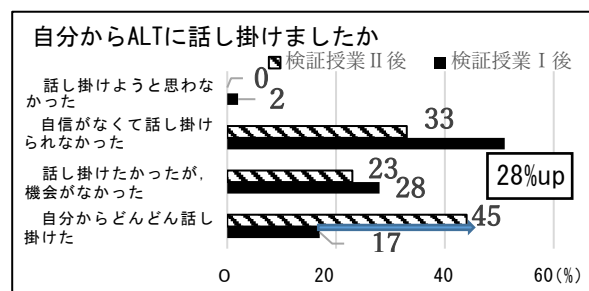
資料 47 外国人とのやり取りに関する調査結果



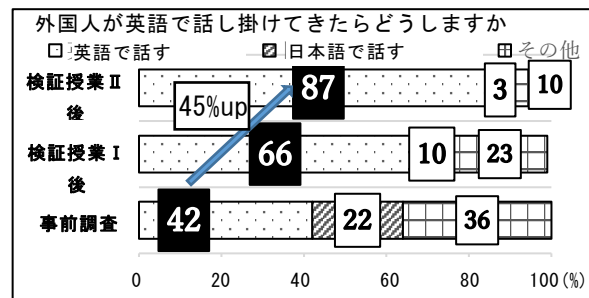
資料 48 間違いに関する調査結果



資料 49 ALTへ話し掛ける際の意識調査結果



資料 50 外国人に話し掛けられた際の意識調査結果



## VI 研究のまとめ

本研究では『外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい』と学び続ける児童の育成を目指した。児童の中に、英語は好きだが英語を活用することには自信がもてない者がいるという実態が

あり、内発的動機を高める学習方法の工夫と児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業づくりに取り組むことで主題の児童像に迫ることができると考えた。内発的動機を高める工夫として自律性、関係性、有能感に重点をおいた学習方法の工夫を設定した。また、児童の実態に合わせるために「CLIL」の授業の指針となる四つの「C」に重点をおき、従来の外国語科の授業づくりに新たな項目を追加して授業づくりを行った。これらの成果として、英語でのコミュニケーションを楽しむ児童や既習表現を使おうとしたり、自分からALTに話し掛けたりする児童、英語での表現方法が

分からない際に、自ら友達や教師に尋ねたり教科書等で調べたりする児童といった、主題で示す児童の育成へとつながった（資料51）。本研究授業で取り組んだ様々な手立ては、児童の振り返りなどから複合的に働き、結果として目指す児童像の育成に寄与したのではないかと考える。

## 1 研究の成果（検証授業Ⅰ・Ⅱ後の実態調査結果、行動観察より）

【視点1】内発的動機を高める学習方法の工夫の成果は、次のとおりである。

### ア 自律性を高める工夫

単元目標の設定の工夫を図り、児童が英語を活用する必要性を感じながら学習内容や学習方法など様々な場において自己決定できるようにしたことで、多くの児童は自律性をもって学習に取り組むことが児童観察より分かった。自己に裏付けされた行動をしたいという児童の欲求を活用して、外国語学習への取り組みにつなげることができた。

### イ 関係性を高める工夫

協働や協学できる学習活動に取り組む中で、児童は互いに助け合ったり、学び合ったりして関係性を高め、次第に外国語の知識及び技能を身に付けるようになることが振り返り用紙の感想より分かった。他者や集団との関係を確立したいという児童の心理的欲求を活用して、外国語学習への取り組みにつなげることができた。

### ウ 有能感を高める工夫

教師がフィードバックの場を設けたりルーブリックの活用をしたりすることで、児童は「できた。」「分かった。」ことを認識し、有能感を高めることが調査結果より分かった。自身の力によって内的・外的環境と効果的にやり取りをしたという児童の心理的欲求を活用して、外国語学習への取り組みにつなげることができた。

【視点2】「CLIL」に基づいた外国語科の授業づくりの手立ての成果は次のとおりである。

学習内容と言語学習を同時に取り組める「CLIL」の授業をすることで、多くの児童は学習内容を理解したり、自分の考えや気持ちを伝えたりすることに重点を置くため、体験的に英語を活用しながら学ぶことができた。さらに、この一連の学びを通して、児童が、英語を活用する自信をより高めることが分かった。

これらの成果より、外国語科の授業において、内発的動機を高める学習方法の工夫と児童に合わせた「CLIL」に基づく授業をすることで、「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の育成に近づけることができたと考えられる。

## 2 研究の課題

「CLIL」の授業づくりに取り組むためには、教師は児童と共に英語を学ぶ態度が求められる。また、教材の準備の中で十分に複数の教科等の指導計画を確認する必要がある。さらに、ルーブリック活用の際には内容を精選するなどして、活用しやすく工夫する必要がある。これらの課題に関しては今後授業を行う中で解決に取り組んでいく。

資料 51 検証授業Ⅱ後の児童の感想

|                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>自分の力で、自分が伝えたいことを伝えられた<br/>         ことだった。僕は英語を習っていたけど、今回が<br/>         たい。ALTの人たちが来てくれて、自信が持った。もし、英語<br/>         が使えるようになったら、もっとこんな外国の人といろいろ<br/>         なやり取りをしたいと思う。それから、習ったこと<br/>         も忘れずに、練習を続けていきたいと思いました。</p> |
| <p>ぼくの将来の夢は板前です。なので外国<br/>         人が来たら英語を理解し外国人もきかると入れ<br/>         る店にしたい！ じゃあに役に立つと思い<br/>         ました。</p>                                                                                                                |

### 〈引用文献〉

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』 2017 年 開隆堂
  - 2) 直山木綿子 『小学校外国語教育の指導と評価』 2021 年 ぶんけい
  - 3) エドワード・L・デシ & リチャード・フラス ト 『人を伸ばす力』（桜井茂男監訳） 1999 年 新曜社
  - 4) 和泉伸一 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』 2016 年 アルク
  - 5) 池田真 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学 外国語教育の新たな挑戦』 2016 年 上智大学出版
  - 6) 笹島茂・山野有紀 『学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践』 2019 年 三修社
  - 7) 奥野由紀子 『日本語教師のための CLIL 入門』 2018 年 凡人社
- 国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』 小学校外国語・外国語活動 2020 年 [https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326\\_pri\\_gaikokg.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_gaikokg.pdf) (2021 年 4 月 12 日閲覧)
  - 笹島茂・山野有紀 『学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践』 2019 年 三修社
  - 笹島茂 『教育としての CLIL』 2020 年 三修社
  - 中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 2021 年 [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf) (2021 年 4 月 12 日閲覧)
  - 速見敏彦 『内発的動機づけと自律的動機づけ』 2019 年 金子書房
  - 文部科学省 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 2017 年 [https://www.Mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](https://www.Mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm) (2021 年 4 月 12 日閲覧)
  - 文部科学省 「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説家庭科編」 2017 年 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_009.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_009.pdf) (2021 年 10 月 10 日閲覧)
  - 文部科学省 「外国語の指導における ICT の活用について」 2020 年 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/imdex.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/imdex.htm) (2021 年 6 月 11 日閲覧)
  - 渡辺良典・池田真・和泉伸一 『CLIL 内容言語統合型学習（第 1 巻原理と方法/第 2 巻実践と応用/第 3 巻授業と教材）』 2020 年 上智大学出版

### 〈参考文献・URL〉

- 綾部保志 『小学校英語への専門的アプローチ』 2019 年 春風社
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 『知的好奇心』 2015 年 中公新書
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 『人はいかに学ぶか』 2020 年 中公新書
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 『無気力の心理学』 2020 年 中公新書
- 柏木賀津子・伊藤由紀子 『小・中学校で取り組むはじめての CLIL 授業づくり』 2020 年 大修館書店
- 鹿児島県 PR・観光戦略部観光課 「令和元年 鹿児島県の観光の動向～鹿児島県観光統計～」 2021 年 <http://www.pref.kagoshima.jp/sangyo-rodokankou-tokusan/kannko/kannkotokei/> (2021 年 9 月 5 日閲覧)
- 菊池省三・菊池道場 『温かい人間関係を築き上げるコミュニケーション科の授業』 2021 年 中村堂
- クリストフ・アンドレ 『自己評価メソッド』 2012 年 紀伊國屋書店

長期研修者 [横手 優子]

担当所員 [眞正 基道]

#### 【研究の概要】

本研究は、内発的動機を高める学習方法の工夫と児童の実態に合わせた「CLIL」に基づく授業を通して、「外国語で自分の考えや気持ちをもっと伝えたい」と学び続ける児童の育成を目指した研究である。

外国語学習に取り組む児童の育成には「もっと英語でコミュニケーションしたい。」と児童が思えるような内発的動機が大切である。内発的動機づけの研究者であるエドワード・L・デシの理論を基に自律性、関係性、有能感の三要素から手立てを設定した。また、内発的動機を高めた児童が、英語を活用できる場が必要となることにより、体験的に英語を活用する中で知識・技能を身に付け、英語でのコミュニケーションに自信を付けられる「CLIL」に基づいた授業づくりにも取り組んだ。

本研究を通して、「ALT との英語でのコミュニケーションが楽しかった。」「ALT と英語でコミュニケーションできた。」「もっとコミュニケーションしたい。」と思う児童の姿が見られるようになった。

#### 【担当所員の所見】

昨年度から小学校における外国語活動・外国語科が全面実施された。それより前から多くの学校が全面実施に備え、外国語の授業の先行実施を行っていた。しかし、ALTと児童が会話する様子を見てみると、児童は学習した言語材料を全く使えない、使おうともしない状況であった。小学校外国語の目標である「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育成する。」の達成には課題が多い現状があった。それを一つでも解決したいという気持ちから本研究が始まった。

児童の外国語に関するコミュニケーション能力育成のために「CLIL」という第二言語学習方法で、従来の外国語を学んでから使う形式ではなく、外国語を使いながら学ぶやり方で授業づくりの研究を行った。

また、コミュニケーション能力の育成だけでなく、児童の内発的動機付けに着目し、Edward L.Deciの先行研究を基に有能さと自己決定への欲求に基づく動機づけの研究も行った。

本研究が研究にとどまらず、現場でさらに活かせるよう、研究内容の更なる改善も期待したい。